

俳句雜誌

令和四年十二月一日發行（每月一日發行）通卷第九十五卷第十二号

水 明

2022 12月号



《今月のかな女》

餅つきや笑へばゆる、桶の水

(句集『龍膽』)

長谷川かな女

掲出句は、大正十一年の作で、夫・長谷川零余子が「枯野」を創刊して二年過ぎた頃である。新年を間近にした零余子宅での餅搗きかと思われる。その場にはかな女は居たが、零余子はどうか。下男と女中、そして、結社の若者が立ち働いている賑やかな餅搗きの様子が想像できると、餅を返す合の手で二人の息がびったり合うことが肝心。兩人のぎこちない所作を見て見物人が爆笑している。

(鬼之介・註)

水 明

第1107号

— 華の一句 —

蝻螂やマリオネットの幕が開く

池田 珪子

フランス語「マリオネット」の語感には、未知の世界に足を踏み入れるようなロマンがある。糸を付けた人形を操る人形劇は、日本文化の中で育まれた人形浄瑠璃Ⅱ文楽と共通する要素を持ち合わせているように思える。さて、ここに登場したのは、人形ならぬ蝻螂である。夏から秋に時々見掛ける鎌切の動きや所作にマリオネットを結び付けた作者の発想に感心した。
(鬼之介・推薦)

水明

令和4年
12月号

今月のかな女

華の一句

狙ふ (作品)

花芯に降る (近詠)

ひとり心地 (近詠)

風 琴 雪欄作家近詠鑑賞

硯 箱 季音月評

季音「雪」 (同人作品)

季音「月」 (同人作品)

季音「花」 (同人作品)

『水明誌』を繙く

現代俳句鑑賞

山本鬼之介

柚木治子

小倉倭子

町野広子

井口俊晴

境延昭
島津初花
椎野美代子
ほか

松井由紀子
梅澤佐江
大場順子
ほか

大塚茂子
河野はるみ
近藤徹平
ほか

黒岩徳将

網野月を



集 特 家 作
 (石山かつ子)

俳句と私

自選五十句

それは「愛」

二百余年の藪椿

かつ子の一句

石山かつ子

大村節代

矢作水尾

水 明 集

梅澤輝翠
 菅原真理
 篠崎紀子
 ほか

水明集作品評

水 琴 窟 (水明集十月号鑑賞)

山 紫 集

鼓 笛 集 (同人作品)・私の一句

俳誌望見

句集喝采

水明の記事他誌転載

水明塾の報告

水明例会報・各地句会報

お知らせ

新珠賞作品募集のお知らせ

風声・発展基金御礼
 後記

山本鬼之介

池田雅夫

梅澤佐江

近藤徹平

青木鶴城・網野月を

83

題字・長谷川かな女 表紙・内田恵子 カット・福田千春

狙
ふ

山本鬼之介

牡蠣ふんだんに広島焼の分厚さよ

二度咲や光悦寺垣ある離れ

若き遺影はかつての学徒黄落期

冬麗やわが心中のスナイパー

飴切りの音出囃子に七五三

語りかくなれば応ふる馬の息白し

陣羽織脱ぎたるごとく散る紅葉

新巻や荷札のむかし懐かしむ

花芯に降る

柚木治子

天女彫る幾歲月や身に沁むる
山粧ふ命けづりて生れし像
パイプオルガン今し奏づる竜田姫
飽かず仰ぐまごころの像秋裕
栗羊羹のまことの風味知る齡
爽籟や明眸つよき天女像
彩雲を抜けて色鳥飛び交ひぬ

地鳴りにも似たパイプオルガンに誘われて久方ぶりに仰いだ天女像は、氣韻に満ちた花のようであり、あらためて心を奪われた。光背の火焰のように立ち昇る瑞雲は、母の胸のように落ちついた彩色で天女を際立てている。
また現代的な絢爛の色は、特殊な合成樹脂をほどこしているようだ。何度でも逢いたくなる佐藤玄々氏の終生の大作「天女（まごころ）像は、オーラを放ち未来へと立ちつづけてくれることであろう。

ひとり心地

小倉倭子

一片の詩想を描く秋の虹
絵空事かの人に告ぐ今日の月
湯船なか妹を想ふや天の川
待宵のお一人様の抹茶かな
林檎好き父と出会ふか善光寺
遙か来てひとり旅路の初紅葉
亡師の句銀杏黄葉に記す淡い

俳句が単なる御趣味、お遊びです
まされない文学であることに気づか
されてから長い旅路となった。此所
まで歩いて来られた俳句道は、この
先も無意識に続くのであろうか、そ
う、無意識だからこそ足跡を付けら
れたのであろう。高村光太郎の「道
程」を想起す。

私の前に道はない、私の後に道が
残るのである。普段、意識なく齢
を重ねた人生を振り返り、この道で
出会った恩師、先輩、友人達に素晴
らしい影響を受けたことに深く感謝。

風琴

季音雪欄作家近詠鑑賞

町野広子

◇まつり（九月号）

お囃しの屋台揃ひの紹伴天
白虎青龍四神の護る大神輿

金色の鳳凰挿む稲の束

墨田区向島の牛嶋神社では、今年は五年に一度の大祭の予定であったが、来年に延期となる。此処には狛犬ならぬ狛牛が撫で牛として鎮座している。お囃しの屋台には長老を始めとする若衆達が、粋な揃いの紹伴天で笛や太鼓、鉦で祭りを盛り上げる。各町内から繰り出される神輿の中でも、特に作者の地元の本所一丁目の物は、姿と形で一、二と言われている大神輿を誇りとしている。東西南北を司る神（白虎、青龍、朱雀、玄武）が備わった、立派な神輿なのである。目映いばかりに輝く金色の鳳凰には、豊穡の証である稲束が添えられている。江戸の粋に心弾む心地がする。

担がれてこそその神輿や疫祓ひ
夏雲を映し滔々のすみだ川

担がれてこそ、正にその通り。祭りに生き甲斐を感じている人々は、何があっても何処にいても、その日は地元へ戻る。この数年中止が続き、地域の方々は残念な思いをした。都内を流れる一級河川の隅田川。全長三二・五キロ。物に動じないその姿は、いつも明るく気風のよい作者に重なる。

山中みどり

◇山陶房（九月号）

伊賀陶土掌にやはらかし秋の雨

作者の陶芸の地が伊賀と知り驚いた。遠い昔、夫の初めての転勤の地が伊賀上野であった。産まれたばかりの長男を胸に少し遅れて伊賀入りをしたのである。句の「やはらかし」は陶土であり、秋の雨であり、土地の人々を指すとも思う。

薪にほふ松のなげきを聴く夜長
盛り塩に祈る火入れや秋の昼
炎守る三日一夜をかまど馬

いよいよ火入れである。薪となるべく積まれている松。油分を含むそれは火力や火持ちが良い。松の木のにおいが辺りに満ちる。窯の前には塩が盛られ、心清らかに願いを込めるひとたび火の入った窯からは目が離せない。交代で火の番をすること三日二夜。秋の夜は長く、期待と祈りの時を過ごす火から離れた物陰に、かまど馬が身を潜めている。

灰かぶりまづはめでたし温め酒

焼き終えたとして、窯の中は高温。熱が鎮まるまで結果は判らない。たっぷり灰をかぶった陶器と人々。大仕事を成して先ずは乾杯。温め酒がこの上なく美味。濃厚なお人柄のゆら女さん。関西にこの人あり。尊敬する大先輩である。

◇畦道（十月号）

石井喜恵

白鷺の田に下り一步忍び足
野菊晴背に溢るる野菜籠
すれ違ふ人みな陽の香稻刈る日

高足で一步步白鷺の姿が目につかぶ。どこに居てもあの白さはすぐに目に入る。忍び足が言い易て妙。

収穫した野菜が背負い籠から溢れんばかり。自分で作った新鮮な野菜の数々「野菊晴」が、喜びと満足感を更に強調し心が温かくなる。三句目秋晴れの今日は、いよいよ稲刈りの日。黄金田に人の手や機械が入る。年に一度の収穫に辺りは、秋の陽と稲の匂い、そして活気に満ちる。

鴟の贅風あるやうにそよぎけり
暮れてなほ草叢熱ききりぎりす

鴟の速贅は、秋に虫やかげ等を木の枝に貫いて置くものの、翌春他の鳥の餌になるらしい。その贅が風もないのに微かに揺らいている。秋晴れであるう事が確と読み取れる。

秋九月日暮が少しづつ早くなる。日中の暑い内から鳴くきりぎりす。草叢の中から「ギーッチョン」目を凝らして探すも、その姿は中々見つけられない。残暑の熱の残る草叢には相変わらず隠れたままのきりぎりすが鳴き、その声に誘われ雌が寄って来る。土中に産卵し、三〜四カ月の命を閉じる。

嘗ては見たり、体験して来た懐かしい田舎の、故郷の自然をさらりと表現され、只々感服。

◇夏ふたたび（十月号）

五明 昇

魔女狩りし広場の市のさくらんぼ
ハンカチに畳む夕日のエーゲ海

十五〜十七世紀ヨーロッパや米国で起こった魔女狩り。魔術を使ったと疑われたり、邪魔な人物を裁いた広場も、今や陽の当るバザールとなり、活気に溢れ、見た目も可愛いサクランボが幸せの象徴のごと売られている。今の世に生まれた幸せをつくづく感じる。

地中海の一部のエーゲ海は、多くの島々があり、別名多島海。この美しい夕日の景を、ハンカチに包むではなく、畳むと詠み更に確りした意志が伝わる。

ライン下りの余韻沸々髪洗ふ
ネッシーに遇へず湖畔の黒麦酒

ドイツ観光の目玉ライン下りは、雄大な景観の中の古城や歴史的建造物が圧巻。作者はその余韻の中髪を洗う。

イギリススコットランドのネス湖のネッシーは、未確認動物として有名。会いたい夢はどうとう叶わなかったが、湖畔での黒麦酒は抜群。未確認の物にはロマンを感じる。

情熱の国スペインのフラメンコ。インドから流れて来たロマ族が起源で、ギター・歌・踊りに酔い痴れる。場末の酒場で、まるで火蛾が狂ったような本物に出合ったのである。

一句の中に静と動を巧みに盛り込み、世界を旅した作者の心身は停まる事を知らず、頼もしい限りである。

硯箱

◆季音十月

井口俊晴

男日傘が颯爽と行く丸の内 五明 昇

「日傘は女性のもの」という思い込みが最近まであった。だから男が日傘を差していると「気持ち悪く」と感じる人が少なくなかった。でも、猛暑に耐えかねたのか、ジェンダ―の垣根が低くなつたせいなのか、かなりのオッサンでも日傘を差す人が増えている。ここ丸の内ビジネス街でも、日傘を差し、胸を張って颯爽と歩く男性が増えた。でも、日傘を差すのは良しとして、眉毛を剃ったり描いたり、お化粧するのは認めたくないなあ。

立秋や折丁決まる水明誌 大村節代

きょうは立秋。さあ水明十月号の作業に取り掛からねば。八月号が出たばかりなのに、編集部五人は息つく暇もない。まず原稿を載せる誌面の設計図から。雑誌は「台割り」とか

「折丁」とか、印刷機にかけて製本するための特別な編集作業がある。一枚の大きな紙に複数のページ単位で印刷し、それを折って、ページ順に並ぶように製本するからだ。紙を三回折ると十六ページ、四回だったら倍の三十二ページだ。こうして折丁が決まる。「夏季競詠」は十月号のゼヒモノ。誌面は四十ページから五十八ページまでとしよう。

手花火の星屑散らす幼恋 小倉倭子

お風呂に入って浴衣に着替え、暗くなつて庭で花火をした。昨日から泊まりがけで遊びに来ている従兄の宙君と一緒に。持っていた線香花火にマッチで火を着ける。小さな火花がパチパチはじけ、暗闇の中で星屑を散らすようだ。大川の花火大会のような迫力はないが、可愛い火花の輪が広がる。学校の男の子たちはみんな意地悪だが、宙君はとても優しい。なんだか胸がドキドキしてきちゃった。

でむしを踏みさつになる遊歩道

町野 広子

朝の日課にしている散歩。明け方まで降った雨の名残りで、遊歩道のアスファルトは湿り気を帯びている。ジョギングシューズの靴跡がわずかに残るのはそのせいだろう。と、私は慌てて踏み出そうとした足を止める。なんと五円玉ほどのカタツムリが、ちょうど道を横切ろうとしており、私と「衝突する」ところだったのだ。ああ、よかった。

秋暑し時計の鳩が戻らない

川崎 道子

暦の上では秋だと言うのに、まだ暑い日が続いている。そのせいだろうか、何十年も時を刻んできた鳩時計の鳩が、突然動かなくなつて、時計の中に戻らなくなつてしまった。まるで「鳩小屋の中は狭いし、暑くてたまらないから嫌だ」とでも言っているように……。地球温暖化は、こんな鳩時計の住民にも影響を与えているのだろうか。

秋めくや手にしつくりと阿六櫛

原田 秀子

秋らしくなつてきた。今は暑さに痛んだ髪を梳き、すつきりしたい。その時は手に馴染んだ阿六櫛を使いたい。櫛と言えば黄楊の櫛だが、私はこの「ミネバリ」という、もつと堅い木で作った阿六櫛が気に入っている。木曾路・藪原宿の名

産で、黄楊よりも粘りがある。江戸時代からの言い伝えによれば、美人で評判の旅籠の娘「お六」は、持病の頭痛で悩んでいたが、朝夕この櫛で黒髪を梳いたところ、持病が全快したという。皆さんもどうぞお試し下さい。

表札は男名のまま虫時雨

瀬戸 雄二郎

ご主人が亡くなって何年にもなるお宅があるが、表札はずつと変わらずに男性の名前だ。ご近所でもなく、その当時は知らない人は、ご主人がまだ健在だと思っている。理由はよく分からないが、女だけの世帯だと思われると、泥棒に狙われるなど、とかく不用心だと考えているせいかもしれない。ひっそりとした玄関の植え込みから、ひととき大きく虫時雨が聞こえてくる。

診察を待つ雷鳴をききながら

中野 彊

持病の高血圧に加えて最近は何となく体がだるい。猛暑による疲れのせいかもしれないが、そろそろ後期高齢者なのだから素人判断はよくない。そう考えて行きつけの病院を訪ね、診察を受けることにした。待合室には七、八人が椅子に座っていたが、気のせいか誰も不安そうな様子だ。一人が立ち上がって、備え付けの血圧計に腕を差し込んでいます。私の心臓の音のように遠くで雷が鳴っている。

季音雪



バターの香 境 延昭

鮭ステーキじゆわつと焦がすバターの香
「ニーハオ」と笑ふ齒欠けの石榴売り
ゐのこづち雑木林の秘密基地
朝寒の斉唱社訓三か条
生涯を媚びず傲らずにごり酒

野分晴 椎野美代子

酌むよりは呷るがよろし濁り酒
2DK濁酒の壺の置きどころ
破れ蓮やぶれかぶれの命かな
泡沫の極みの色へ酔芙蓉
野分晴鶴歩鶴首の父なりし

参詣 島津初花

秋爽や大社詣での大鳥居

参道へ木の实しぐれの歩を止めり

秋暑や稲荷大社の奉納旗

吾が歩み遅れ団栗転がり来

大社出て手招きさるる紅葉茶屋

秋終る 鈴木康世

さよならは言はぬと文来南五味子

来し方の齡の水尾が見ゆる秋

せせらぎの奏づるを聴く星月夜

推敲の一字を正し夜半の秋

残る日日笑顔が宜し秋終る

晩秋 田寺玲子

海峡を隔つおのころ鳥渡る

秋灯を零しタンカー瀬戸を航く

晩秋のホルン流るる山の牧

掌に摘める零余子の日の匂ひ

草紅葉川にのぞめる摩崖仏

草紅葉 十倉和子

梵鐘の余韻おんおん鹿立てり

渡り鳥天守に立てば眼の高さ

草紅葉鴨場へつづく御成道

腰下ろす石にぬくみや草紅葉

道祖神と交はす笑まひや草紅葉

秋 永野史代

耳栓を抜いて一気に虫の声
地図になき場所も吹きをり夕野分
数珠玉ころころもう帰ろうよ夕暮れだ
弔ひ一つ村人出払つてゐる暮秋
零余子の蔓引けば少女の顔となる

深 秋 西山 貴美子

禁色のひといろ残る酔芙蓉
アングルを少し変へたり掛大根
そぞろ寒盛つ切り酒を引つかけて
霧深し見知らぬ街のジャズ喫茶
シクラメン嬉しき時も半開き

秋の川 波多野寿子

夫の忌や滔々と行く秋の川
草もみぢ生涯も斯く美しく
快き曾孫の俳句や秋うらら
便り来ず便りもせず秋さびし
夕風に野菊の影の揺れ止まず

竹の春 星野和葉

汲み置きの水の黙りそぞろ寒
裏木戸のふはりふはりとそぞろ寒
うそ寒や鍵穴に鍵あたりなし
土豪のやうな石灯籠や竹の春
この気力素直に受けし竹の春

暮の秋 茂木和子

夕花野こきと節骨よく鳴るよ
穴に入る蛇つややかに化粧して
暮の秋枕屏風の掠れ文字
母の歳越えて健やか暮の秋
研ぎ上げし包丁並ぶそぞろ寒

雨月抄 矢作水尾

ひそやかにまたしたたかに秋の草
「雨月抄」思ひあらたにかな女の忌
秋草を剪る度鳴らす花鋏
蝸の声全山に鈴をふる
推敲の一字に灯火親しめり

秋日和 山中みどり

賑々し小鳥震災慰霊堂
晒し干す布巾の戦ぎ秋日和
身籠りし孫の項うなじや秋日和
童返りの夫の掌秋日和
海馬醒ます妙薬の欲し柿紅葉

広重ブルー 柚木治子

竜胆忌まなざし深き遺影かな
力入れ供花の竜胆剪る女
忌を修す広重ブルーの秋の空
秋水を湛ふる大河かな女の忌
秋水や三步で足るる無明橋

古都中秋 由良 ゆら女

飛火野の空切り揃へ松手入
紅葉して木木は別れの宴かな
地虫鳴く五重の塔の心柱
大仏殿の闇ふるはせて残る虫
点りゆく窓を重ねて十三夜

旻 天 網野月を

秋晴や「春夏秋冬中」といふ看板
新松子若き庭師のヘルメット
生きるとは水飲むことよ秋蛾ひひる
裏返す心の襞や秋日和
丘の街小鳥と話す聖かな

流れ藻 石井喜恵

流れ藻に夕日の翳り秋の水
星流る岩間に光る忘れ潮
人遠く届かぬ思ひ流れ星
無住寺に人の気配や石榴割け
ざくろ紅しぼんやりしてはいられない

条 幅 石山かつ子

古峰ヶ原の一の鳥居や刈田径
秋気澄む棚に吊せし飼葉桶
条幅の墨の掠れや秋深し
清涼や濃継ぐ嫁が来るといふ
秋うららたどたどしくも懸想文

草紅葉 大橋 勉代

切株にすつくと秋芽越天楽
秋高し光ふりまく巫女の鈴
月山がつかんにかなふ池塘の草紅葉
煙吐くを怠る高炉草紅葉
まぼろしの僧兵躰てり蕎麦の花

なほ遠く 大村 節代

冠木門男粹がり今年酒
横丁の馴染の小店新走
高齢化の村に移住者暮の秋
思はせ振りな伏せ字の手紙秋深む
草紅葉ブツセの空のなほ遠く

爽 快 小倉 倭子

神木に触るる心身秋澄めり
澄む秋のコンサートへとハイヒール
丸刈りの学童ひとり刈田道
一農夫刈田の中に突つ立てり
成せば成るこの道一本刈田風

秋の 辻 栢尾 さく子

秋の水白き素足を石に乗せ
論争のあとの沈黙虫を聴く
正論を云へばちりぢり秋あかね
終焉か瘦せやうもなき鉦叩き
うしろ手に婆消えてゆく秋の辻

秋 晴 菊池 ひろこ

高圧線の翳なす野面蟬蛸とぶ
草の実や山羊の乳売る一軒家
秋晴を二階の窓にゐる兄弟
秋晴へ上履き入れは投げやすし
蹲に水道工事来て金秋

月 待 ち 五 明 昇

うまさうに佐渡が頬張る秋の雲
真打に男の色気秋裕
種々は武州の地産月祀る
宵闇に江戸の名残の橋幾つ
海峡を繋ぐ漁火十三夜

毎月25日発売 定価1000円(税込) 月刊 **俳句界** 2023年 **1** 月号

特集 必読! 俳人たちの名文
杉田久女:坂本宮尾 能村登四郎:能村研三 飯田龍太:井上康明 金子兜太:田中亚美 藤田湘子:宮坂静生 野澤節子:松苗秀隆 岡本 眸:松岡隆子 青柳志解樹:中村姫路 稲畑汀子:稲畑廣太郎

特別作品21句 小澤 實
クラヒマ 俳句界NOW 鈴木しげを
特集 思わずうなる! 上五・下五
●「上五」佐藤郁良 如月真菜 五十嵐秀彦 吉田千嘉子 西村我尼吾 川越歌澄
○「下五」加藤かな文 相子智恵 行方克巳 こしのゆみこ 竹岡一郎 小田島渚

投稿欄選者新春競詠
特別対談 姜 琪東×アドリアン・カルボネ
*セレクトション結社 「雲取」鈴木太郎
私の一冊 池田澄子 「トイ」「豈」
佐高信の甘口で「コンニチハ」
対談 山口 広 (弁護士)

「俳句界」投稿欄 一流選者14名! 日本一充実の投稿欄

※一部変更の可能性があります。

株式会社 文學の森 東京都新宿区高田馬場2-1-2 田島ビル8F
お求めは... ●〒169-0075 TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

季音月

胡桃

松井由紀子

縄文のかたちそこばく鬼胡桃
 胡桃割るわれにも気負ふものありて
 うなじ直ぐに笙を吹くひと秋澄めり
 納骨の旅路木犀よく香り
 文殻のけむりのやうな秋思かな

菊人形

大場順子

花芙蓉お市の方の化身とも
 秋の蛇舌美しく隠れけり
 酔へば又昭和の話濁り酒
 古井戸は城の抜け道るのこづち
 尼將軍の白菊凜と菊人形

秋闌ける

梅澤佐江

ぎんなんの爆せて古代のひすい色
 金風や移ろひ秘むる二条城
 藁焼きの煙むらさき夕刈田
 暮れなづむ街晩秋のひとつ星
 深秋や受話器の奥の夜想曲

秋の空

宇田白鷺

畠の木に囀かけたる少年期
 稗・黍も姿けしゆく日本地図
 静けさや水の底まで秋の空
 秋時雨背なに小太鼓天城越え
 短日や敦賀港の赤煉瓦

冬はじめ

鳥羽和風

相輪に冬立つ気配厳海寺
 カーナビに先導されて小六月
 補聴器に侘しき残る冬の虫
 冬構田んぼ百枚丸裸
 川の字で詣づる社七五三

自由律

丸山 マスミ

秋晴や松籟にある自由律
水煙の裾引く化仏秋高し
引く波のかそけき響き草紅葉
武蔵七党駆けし武蔵野雁来紅
上州訛飛び交ふ茶屋の乳茸蕎麦

熟れ柿

山田 美佐尾

熟れ柿の鮮紅映る切子皿
縁日の戸板一枚富有柿
義貞の剣還れよ秋の海
西方に上がる軍配秋の声
朝寒や山門堅き古刹かな

晩秋

森川 義子

晩秋の大河を下る小舟かな
一条の光り射す沼蘆の花
車窓より富士を遥拝秋澄めり
掠さわぐ罫大樹に夕日落つ
連れ立ちて刈田横切る測量士

草紅葉

松宮 保人

詩舞の吟演じ終へたり秋の空
新葉を吐き出してゐるコンパイン
理科室へ迷ひ込みたる赤蜻蛉
絵模様へ傾る棚田の草紅葉
自販機のホットを選ぶ秋時雨

秋日和

高島 寛治

どぶろくや甘酸つばさは父の味
街明り消えても消えぬ夜学の灯
退院の妻との余生 秋日和
抱き起こす菊人形の軽さかな
眼が合ひし菊人形は着替へ中

秋灯下

井上 燈女

秋灯下手ずれの辞書を五十年
秋耕を父に習へば土の声
柘榴割れ腹の底までさらけ出す
渋柿を剥く度皮の反り返る
播鉢を躍らせ母子とろろ播る

黒たまご 正木 萬蝶

入相の女将の孤影秋の蛇
売られゆく臓器の行方雁渡し
秋晴や絵帆展帆日本丸
秋晴や大涌谷の黒たまご
雁渡しかつて土蔵は泣く処

口 笛 内田 恵子

空はみな音を吸ひ込み野分晴
葉鶏頭間延びしてくる掛時計
口笛を吹いて彷徨ふるのこづち
棒持つて我は大将ゐのこづち
美 顔 術 施 す 媼 新 走 り

晩 秋 井上 玲子

晩秋の嵯峨野路わたる鐘の音
晩秋の空に悠悠とんびの輪
晩秋の入り日追ひゆく鳥の群
秋深し見沼田に置く夕ごろ
地底湖は青く輝き秋の水

逆 回 り 池田 雅夫

褪せてゆく十一月の山河かな
立冬や鼻むずむずと歪む顔
どつとくる冬に怯ゆる峡の村
初霜や日課の径を逆回り
日だまりに手枕の猫冬ぬくし

車 椅子 藤澤 喜久

秋うらら車椅子デビューとなりしかな
車椅子デビューの胸に赤い羽根
すれちがふ匂ひの記憶秋気澄む
幼馴染のゝ生きていろよと今年米
金木犀私やつぱり方向音痴

撥 捌 き 町野 広子

鶏頭群れ時に激しき撥捌き
秋簾内より届く嘎れ声
傾ぎたる巣箱を戻す野分あと
野分あと夕日のなかを中学生
老いたりと云へど骨太葉鶏頭

新走り

森本早苗

勢子三人倒して鹿の角切らる
寝上戸の面影を追ふ新走り
秋深むアップルパイの得意な娘
御城下の残る土墨や昼の虫
穠田の子鷺一羽の思案かな

竹の春

井口俊晴

裏山は狸も出るぞ竹の春
お月見や戦火なき夜を愛ほしむ
新走り酔うていつものお説教
柘榴裂けDNAの鬼女のぞく
草叢の防災井戸に露しとど

秋刀魚

松山清子

着飾りし小犬の散歩草の絮
ミュージカル反芻しつつ梨をむく
天守閣淡く浮かべて十三夜
思はざる齡迎へて秋刀魚焼く
秋刀魚食ぶ綺麗に解す人なりし

実ざくろ

荒井俱子

冬瓜ごろり婆のほまちの無人店
石榴裂け友が弱音をぼろり吐く
実ざくろの仏頂面が笑み零す
猪垣や監視カメラに人の影
鹿垣や引き売りの来る峡の村

につこり

福田千春

売店に「につこり」といふ梨笑ふ
秋晴や入場行進曲聞こゆ
零余子採る爺の脚立を婆支へ
地産地消名入りの零余子買ひにけり
秋晴や鳩鳴く朝のホットドッグ

邪気払ふ

松本光子

名を替へつ大河となりぬ雁渡し
消防車竹林真つ赤に大西日
秩父路や諏訪の末社の秋まつり
柘の咲いて別れの清め塩
花柘香る折戸に邪気払ふ

上野恩賜公園

渡辺 舍人

井沢八郎を味はし上野敗荷
焼栗や深眼差しに稚児と婆婆
ゆふがほや露地垣塀に五六輪
揃ひたる戦ぎ羨しよ相撲草
キミタチノアイカモヲミナヘシヲトコヘシ

草紅葉

川崎 道子

草紅葉この道行けば狼煙跡
草紅葉踏み入る野原古戦場
芒原救命胴衣欲しくなり
百濟よりの土器出土渡り鳥
高層ビル古墳群越え鳥渡る

松茸

上戸 千津子

松茸の香に誘はれつ高楊子
龍田姫六甲山へお出座しに
幻聴か廃寺で読経秋の暮
芋届き島の様子の新聞紙
古里の漁港彷彿雲

草紅葉

井関 礼子

半生を峽に住み旧り草紅葉
季の移りいつしか土手の草紅葉
手入れなき狭庭そのまま草紅葉
故郷を離るも遥か草紅葉
草紅葉故郷ひたになつかしき

アサギマダラ

野口 和子

裏新道と呼ばれし小路金木犀
アサギマダラ舞ひ降り庭の藤袴
無患子を落とす風あり上田城
きちきちやミシンのリズム心地良
豊の秋けふも賑はふ産直店

松茸

西浦 千枝子

松茸匂ひただいまの声弾みけり
不揃ひの橋杭岩や小鳥来る
狛犬に大きなマスク秋祭
体操の腰伸びきらぬ秋時雨
蕎麦の花生き物達のよりどころ

季音花

麦とろろ 大塚 茂子

裏山の父の匿路や麦とろろ
初恋は野外授業やるのこづち
秋の園琴柱灯籠凜と立つ
軽やかな鳥の助走や秋の園
峡の家の軒に陽を呼ぶ柿簾

竹とんぼ 近藤 徹平

空澄むやジャンボ機を追ふ竹とんぼ
発条あらば鴨越を秋の暮
美術展時計溶け出す幻想画
「はやぶさ」や刈田の中を突つ走る
村芝居本家の若が七変化

秋の限りを 河野 はるみ

敷石の形それぞれ草紅葉
急坂を下り下りて紅葉川
ころころと流し一周衣被
終活など致すものかや秋深む
友の句をああだこうだと秋深し

銀輪のベル 野田 静香

鳥と子に囲まれてゐる柿の秋
逆運の今日の占ひ秋の虹
椋鳥の群れ町の喧騒消すごとし
シネマ果つ涙の乾く夜寒かな
銀輪のベル森林へ霧うごく

移ろふ秋 日高 道を

方丈の庭の木漏れ日飛蝗飛ぶ
外覗く貌は強面木樵虫
サツパ漕ぐ娘船頭秋時雨
黍嵐母ぢやの声も掻き消され
かりがねのひと声啼きて茜空

水澄む 青木鶴城

離宮へといざなふ並木鴟の晴
秋深む枯山水に読誦かな
水澄むや先達の句碑数多なる
代代の矜持を継ぎて青蜜柑
逝く秋や抽斗に文入れしまま

新米 熊倉千重子

魂入れて主役仕上ぐる菊師かな
地に届くほどの懸崖菊花展
悔しさを撥条に男の子や蝗虫飛ぶ
新米や先づさつくりと塩むすび
まだ濡れし草搔き分けて飛蝗捕り

短い秋 石田慶子

秋晴や「来賓の方入場門迄」
新米も早特売と父の皺
道の駅ざるに零余子の天こ盛り
秋高しころころ笑ふ握り飯
秋澄めり心整ふ鞍馬山

組み体操 石川理恵

組み体操上へ上へと鱗雲
不自然な笑みを浮かべて菊人形
研ぐ音のまこと軽やか今年米
知らぬ間に失くしてしまふ赤い羽根
秋明の胸に震へる赤い羽根

陶狸 笹本啓子

萩の宿きりきりしやんと若女将
秋の海点となるまで送る船
草紅葉ここより先は禁猟区
鹿垣や空砲響く峡の里
十三夜男振りなる陶狸

源氏名 保坂翔太

大袈裟に泣く兎宥むる案山子かな
飛び石や雨粒含む鶏頭花
秋ともし古文書解く学者肌
溪又溪大鯀又大鯀
源氏名を呼び合ふ仲居秋の草

炬 開 原田 秀子

「百葉」と宣ふ夫の温め酒
入日影水面に映し秋の苑
囲炬裏開く時代後れを楽しみつ
白き灰均して亥の日囲炬裏開く
金銀の木犀優に一世紀

芋の露 曲淵 徹雄

提燈の尻も小躍り踊唄
遺されて揺るる半鐘黍嵐
竜胆に極まる碧やかな女の忌
今もなほ主従の契り菊人形
女形のふりのいやいや芋の露

葛の花 飛永 鼓

葛の花古りにし色を零しけり
飛行機の爆音残し鱗雲
今日一日無事に終へるや木の葉髪
待つ人のあることうれし夜寒かな
一人立つプラットホームや十三夜

小 菊 宮崎 チアキ

長月や夢の続きのうやむやに
化粧室にほつと一息小菊かな
星飛んで最後の光わが胸に
地をすべるやうに自転車秋微雨
秋霖や歳時記めぐり一日過ぐ

キリン観て 下川 光子

キリン観て「イソップ橋」の秋夕焼
手招きに近づく騏驎秋うらら
爽やかや遠まなざしの騏驎の瞳
ゐのこづち日向の匂ひ持ち帰る
濁り酒ひと節父の祝歌

途中下車 檜鼻 ことは

駅の名に魅かれて途中下車の秋
秋薔薇ワーズワースを訪ねし日
陽だまりへ腰掛ひとつ金木犀
息災の今が幸せ草紅葉
欲張らぬことが肝心葉掘る

秋時雨 野平 美紗子

後の月窓より受験生照らす
餌を漁る鳥影静かなる秋野
元寇を思ひ起こせし台風禍
秋夕べ門灯点滅する我家
偶に行く夫の古里秋時雨

秋一日 宮崎 紫水

散歩後の紅茶薄めに秋の朝
秋の昼授業こつくり無きにしも
帰路に就く教師足早秋の暮
自鳴琴余韻薄らに秋の夜
独り寝を幾夜重ねて夜長かな

婆の庭 松島 寛久

秋の空太陽味はふ婆の庭
連結の秋茜高しランデブー
蜻蛉の眼空も水中も我が世界
複眼で吾みる蜻蛉喜寿の坂
想子のあの一句と白眉秋の天

秋刀魚 田中 章嘉

コンバイン秋天の下軽やかに
魚市場今日の秋刀魚は根室沖
秋刀魚焼く細身の姿艶やかに
紅葉山登り降りの車列かな
嫁姑枯露柿作り忙しなさ

夜学生 葛城 千世子

台風来綱かつちりと巻く漁師
宿題のパソコンひらく夜学生
夜学生古き資料を調べをり
夜学生指一本でひくピアノ
二の丸に十人で生く狂ひ菊

渡り鳥 後藤 綾子

群青の波頭ゆらめき鳥渡る
幼児の見様見真似の盆踊
そぞろ寒深夜に響く救急車
愚痴こぼす電話長々秋の夜
鳥渡る怠けること許されず

秋 思 中 野

疆

虫の音よ生きる声なり夜の闇
訃報を驚きつ見て秋思かな
昼食の秋思もすくふ五目粥
すすき野に分け入る人の続きをり
葉鶏頭傾きつつも道しるべ

☆

☆

特 集 わが誌の創刊号を読む

特 集 飛躍する卯年の俳人たち

新春巻頭作品7句

秋尾 敏・今瀬剛一・尾池和夫
大高霧海・加古宗也・小林貴子
辻 桃子・対馬康子
ながさく清江・山田佳乃

俳壇

1月号

12月14日発売
定価900円(税込)

巻頭エッセイ
宮坂静生

八木健選 滑稽俳壇

四季巡詠33句「第Ⅲ期」…佐怒賀正美・武藤紀子

俳人の住む町…朝妻 力・高橋千草

自句自戒…権 未知子

新連載

変わりものの記…ふけとしこ

名句のしくみと条件…坂口昌弘

私の本棚・私の一冊…伊藤政美

十二か月添削教室…前北かおる

俳句と随想12か月

井上論天・清水和代

本阿弥書店

〒101-0064

東京都千代田区神田猿楽町2-1-8 三恵ビル 電話03 (3294) 7068 振替00100-5-164430

『水明誌』を繙く（水明十月号）

黒岩徳将（現代俳句協会幹事・
青年部長）

新走 紅を 残せし 升の 角 山中みどり

格好のいい句だ。口紅が残った升というモノを提示して、艶っぽい人間の存在を想像させるという俳句の骨法の一つを正統的に踏まえている。「紅の残りし」ではなく、「紅を残せし」と、人間ではなくあたかも升が主体かのようにも読める。こう書いた方が、紅の色がはっきりと見える。

「角」はどうだろう。升の辺ではなく角をみせているということは、升についた紅を一度拭いたものの角の部分に残っていることを気づかなかつたということだろうか。宴席の大雑把な所作が垣間見える。そういった景の提示の仕方と同じくらい、一句を「角」で終わらせることの音の気持ちよさ、きりっとした感じを楽しみたい。「新走」という季語に、酒好きの逸る気持ちも感じられた。

世情を憂いたり、既存の価値観を揺り動かすような方向性ではなく、ただただ「見せる」ということと「一文字単位で表現にこだわる」ことが「俳句形式」を信じる方法の一つではないかと思いついた。主人公は、ぐいっとやったのだろうか。同じお酒を飲んでみたい。

秋風に 頭尾なければ 灯を消せり 栞尾さく子

秋風と灯を消す、物悲しい組み合わせで、寂しさが体を離れないような気持ちにさせてくれる。末尾が助動詞「り」なので、「なければ」は確定条件で「ないので」と解釈した。頭尾がないことと灯を消すこと、因果関係を半ば強引に詩の中に持ち込んでいる。物理的には不可思議な把握であり、そこが興味深い。誰もこのようなことを言っていないからである。秋風「に」とイメージを引きずるように続く言葉に繋げたところも句の雰囲気合っている。

「龍淵に潜む」という言葉がある。中国後漢時代の字典『説文解字（せつもんかいじ）』に「竜は春分にして天に昇り、秋分にして淵に潜む」とあるのを典拠とする想像上の季語であると歳時記にある。「頭尾」という言葉の固い響きからこの季語を想像した。風のように龍が頭から尾まで大きく体をしならせて私の前を過ぎ去っていくとしたら、それはどれほど喪失感のある物語の始まりや終わりであることだろうか。暗闇の中でも、頭の中には秋風の化身が脳裏を渦巻いているのかもしれない。

現代俳句鑑賞

網野月を

人々よ着重ねましよう夜は永し
恋しいという懐かしい言葉よ雪
「私は」と書き恥ずかしや月は何処

池田澄子

〔俳句〕10月号・人々よより

すこぶる「切れ」の効いた句ばかりである。口語表現の後の切れ、座五の中の破調の切れ、中七の切れの後の句意の転換、いずれも見事なのである。他の四十七句も鑑賞したいところである。

はじけ散るビー玉のあの夏の色

藤野 武

〔俳句〕10月号・長い日暮れにより

中七から座五の「あの夏の色」とあるので、もしかしたら無季の句になるかも知れない。「はじけ散る」とあるのでビー玉遊びのビー玉であろうか、印象に深く留めておいた色合なのである。他に「穂麦風抱いて長い長い日暮れ」がある。

ガソリンの匂ひハイビスカスの赤

阪西敦子

〔俳句〕10月号・銀色により

強烈な印象を訴えかけるような句意である。二つのものを

並置して、しかもその二つは臭覚と視覚に拠って捉えられている。心の中へ飛び込んできた両者を並置することで、この両者を受け容れさせられた作者の心の在り様を想像したい。他に「蜉蝣の三つ数へて銀色に」「十頭のうち八頭の鹿が見る」がある。

吾亦紅逆接の詩を愛しけり

田中泥炭

〔俳句界〕10月号・黒白より

否定形の俳句、反語の俳句は出会うチャンスがあるのだが、「逆接の」は中々無いように思える。ただ逆接の否定形は証明されないように、掲句自体が逆接として解釈できるのである。筆者が掲句の逆接のロジックに嵌まつてしまったようだ。他に「終戦日誰も黒白には非ず」がある。

この雨がまた雲となる花野かな

石原道明

〔俳句界〕10月号・秋霖より

大自然の循環を想起させるような句意である。が作者は、そんな科学的なことを構想しているのではないだろう。座五の季語「花野」の秀でた趣を只々表現したいのだろうと解釈した。他に「秋霖や武満徹レクイエム」がある。

磔刑のイエスを舞ひぬ黒揚羽 坊城俊樹

〔俳句四季〕 10月号・巻頭句より

座五の季語「黒揚羽」の存在が句意を決定している。「黒揚羽」が「磔刑のイエス」のように舞い飛んでいる、と解釈した。羽を広げて舞飛ぶ姿は、両腕を開いたイエスの姿に準じているように思われる。

桃吹くや母の母郷はわが母郷 藤田直子

〔俳句四季〕 10月号・桃吹くより

「母郷」は一体何処なのでしょうか。兎に角、お母様と自分の故郷が同じであるということであり、そこは綿花の栽培が盛んなところなのであろう。「桃吹く」様を見ると、「母郷」での「桃吹く」景色や綿摘みの作業風景が思い浮かんで、故郷への思いが強くなるのである。

ポストまで急げり夜の鰯雲 次井義泰

〔俳句四季〕 10月号・鰯雲より

夜空に雲を見出すことがある。筆者は締切りぎりぎりになることが多々あるので、夜中にポストへ投函しに行くことがあるのだが、投函後に見上げた夜空に雲を視認する。「急げり」とあるので、掲句も投函後のことであらう。感傷を押し殺したことで、情趣の横溢した結果を齎している。

嘘つきは嘘が真実蚯蚓鳴く 伊藤政美

〔俳句四季〕 10月号・そして秋より

上五中七の句意は正しくその通りで、達観なのか諦念なの

かは分からないが、人を見ることの卓越した眼力を感じさせるものである。作者ご自身は実に優しい方なので、嘘つきへの同情とも考えられるように筆者は思ってしまう。座五の季語が秀逸である。他に「また八月折鶴だけが増えてゆく」「八月やもと人間の神多し」がある。

炎天をゆるゆるとゆく己が影 金原雅子

〔俳誌「駒草」〕 10月号・駒草集

「己が影」を突き放して、客観表現に持ち込んでいるようだ。影の主体は、勿論作者ご自身であろうが、作者の喘ぎや熱苦などは、影には微塵も見取れない。作者ご自身も幻惑の中にいるようである。

昏きから呼ぶこゑからすつりの花 城中 良

〔俳誌「都市」〕 10月号・朱雀集より

上五中七の「昏きから呼ぶこゑ」はどのような声なのか？ここの部分の解釈は読者に任されているようである。実在の人間の声か、「からすつりの花」の声か、心象の声か、想像が広がる。それぞれの声の在り方で句の意味合いも異なってくるだろう。魅力的な世界を展開している。

口笛の口して日傘しぼるかな 瀬間陽子

〔俳誌「陸」〕 10月号・作品Iより

日傘を巻いて仕舞う際に口笛の吹き真似をしていると解釈した。決して音は出していないのだが、口笛のリズム感に合わせて巻き取っているのであらう。「口笛の口して」も「しぼるかな」も新しい。

俳句と私



石山かつ子

水明と岩楓のご縁は、昭和三十年ごろかな女先生をお迎えて俳句のお話をしていただいたのが始まりだそうです。

その後、数年して瑳迷先生（鬼之介先生の御尊父）のお弟子さんの平野郁子さんのお世話で、まだお若い明世先生に来ていただき「楓の会」が始まりました。そして岩楓にも一つということ「雛の会」が誕生しました。

その昔、神隠しにあったように長男を亡くして呆然として外出もままならず隠ってばかりいた私を友達が心配して、俳句を勧めてくれました。見学だけでもよいから……と半ば強制的に雛の会へ連れて行かれました。

雛の会は、人数も多く地元の人がほとんどで明世先生を中心ににぎやかな三十代、四十代の若々しい会でした。入会して間もなく、まだ季語も何も分からない時に明世先生が心臓の手術の為に長い間お休みになり自習になってしまいました。しかし又、お元気になって指導してくださるようになりました。何しろ昭和五十四年のころの心臓の手術は命懸けだったと思います。

その後、明世先生の提案で会場を南辻公民館に移して、午前中は吟行。田圃で芹を摘んだり、接骨木より木耳を採り昼食にしたり、秋になると道端の烏瓜を手操ったり、餅を搗い

たり、午後は句会と楽しい日々でした。いつの間にか俳句にとっぷりとつかっていました。

やがて柿の木塾・珊瑚の会・第四例会と数も増え吉田静二行事部の見習いを経て行事部に入らせていただきました。

柿の木塾は発行所で黒板を背に紗一先生、明世先生を囲んでの勉強会及び句会でした。華やかな明世先生と紗一先生のお二人のお姿は一对のお雛様を見ているようでした。

ある時、紗一先生のお見舞に伺いますとベッドの上で虹色の毬を抱えていらつしやる。問いますと「この毬で摩ると病気が治るんだよ」と大切そうに肌身離さず持つていらつしやる。入院なさっても毬は先生とご一緒でした。

飛花落花仏足石の窪みにも

村の守り本尊をお祀りしてある岩楓の慈恩寺観音、板東十二番札所。昔は、浅草の浅草寺と共にとでも賑わったそうですが今は閑散としています。玄奘三蔵法師のお骨のある寺で、ここよりさらに奈良の薬師寺に分骨されたそうです。

句会以外は句を作ることをあまりしない私は明世先生にあと三日で締切だから句が集まらないので投句しなさいと言はれ観音様にお参りに行きました。磴をのぼって行くと脇にあ

る仏足石にも桜が散ってきました。

絹まとふ即身仏や木の夷降る

新潟県村上駅近くの観音寺に日本で最後という即身仏があります。その寺の脇にある穴の中でお経を唱えながら即身仏になったそうです。村人は上人様、上人様と親しみを込めてその生涯を話してくれました。白絹をまとい何の囲いもなく座して、いつも村人を守ってくれているようです。

農の衣のがばがば乾く冬隣

いつも親子四代で暮らしている実家は今でも四代です。母は常に農良着で休む隙もなく働いていました。村で一番田畑の多い家の嫁であり主婦であった母は大変苦労したと思います。

田植えや稲刈りは隣近所の人達が総出で手伝いに来てくれて、水が張る頃までには何とか終わります。家で織った野良着は固くてごつごつとしていました。

墨糸のするする伸びて五月晴

昔は、柱に墨を打つのは棟梁か脇棟梁でした。まず一棟建てる時は、材木屋より作業所に木材が積み上げられます。新しい木の香でむせ返るようです。棟梁は注文した材木の相を見ながら、梁組、柱と並べ墨壺より糸を伸ばしながら墨付が始まります。それから柄切りです。当時は大工さん小僧さんいつも二十人ぐらい働いていました。五月のさわやかな風の中で職人達の足取りも軽いきびきびとしています。

山際を行ったり来たり狩の犬

一年のうちで猟が許可されているのは、十一月十五日より翌年の二月十五日まで。初猟のころです。山際は人家の近くにいるのは雉子。どんぐりや草の実などを食べます。雉子は日本の国鳥になっていますが国鳥の中で猟のできる唯一の鳥です。雉の匂ひを感じ取った犬がそわそわとしてきて、動きが細くなってきました。

山祇の祠小さし冬木立

溪かたがの傍を歩く柚人だけの通る径。倒れた木々には苔が厚く付いています。朽ちた木に足を取られて歩くにも困難です。この近くには熊棚も見られます。前に来た時、夫が先に行きその後を歩いていると突然熊が目の前に木から降りて来て、あつという間に去って行きました。熊もびつくりしたのでしよう。その先に壊れかけた祠がありました。

新珠賞を頂いた全国大会は京都でした。嵯峨野を散策していた時に、ふと生えたばかりの二葉のみじを見つけ大切に持ち帰り、鉢に植えてしばらく育てました。その後庭に移して一本はすくすく育ち、庭の中心で秋を楽しませてくれるようになりましたが枯れてしまいました。あまり大きくならずに庭の隅にあつたもう一本が秋を迎えています。私も残っているのみじのようにゆつくりと俳句を楽しみたいと思います。

この度はかな女賞ありがとうございました。
鬼之介先生はじめ句友の皆様これからもよろしくお願い致します。

自選五十句

石山かつ子

飛花落花仏足石の窪みにも
雛送る波が一押し二押しす
家守る二百余年の藪椿
来し方は煙のごとし白山吹
墨糸のするする伸びて五月晴
老いてこそ華やぐごとし春の風邪
斜に構へたるお見合ひの春裕
マネキンの飛天のやうな春着欲し
春寒や個々に母あり無言館
梅雨入りかな雲速き日の昼の月
風薫る犬に格付けされてをり

言ひかけて言へぬ一言若葉風
雲の峰トツプギアーに入れ直す
山奥の柚だけの知る山清水
魂を抜かれしごとく灯蛾の舞ふ
釣竿を肩に少年朝曇り
かなぶんに飛び込まれたる野外劇
宙を見て老いの独白夕端居
紅絹ほのと見ゆる袖口風の盆
十六夜の笑ひころげる泥人形
秋晴や畑に携帯ラジオ鳴る
木通の実夕日の色に磨かれて
絹まとふ即身仏や木の実降る
木の実コロコロ着地の場所を探しをる
ここだけは嫁の外持田稲運ぶ

秋日和お握りすべて規格品
そこはまあ少し譲歩の芋煮会
風呂落とす声の限りをつづれさせ
クツキーに継粉の残る文化の日
農の衣のがばがば乾く冬隣
百年を継ぐ棟梁に冬の虹
母の手はごつき農の手鎌鼬
列組んで一揆の里の葱畑
ゆるやかに座せば公達都鳥
波に浮く白の品格百合鷗
やつちやばの常も破れ声冬ざる
紐育まで地球儀回し冬うらら
山際を行ったり来たり狩の犬
山祇の祠小さし冬木立

夜叉となり仏となりて大焚火
心中したきものも居らねど近松忌
ぬくさうに枯れてゐるなり葦の原
藁苞の中に地のもの寒厨
無鉄砲な漢が走る薄氷
鷹の舞ふさみしくなればなほ高く
竹藪の笹のさやぎも年の暮
大晦日灯の皓皓と薬師堂
女正月少しの酒に惚気でて
福寿草似すぎし母に会ひたくなし
ちやんちやんこ雀にひたすら餌を撒いて

それは「愛」

大村節代

あたたかや手話の手胸にそれは「愛」

掲句は昨年度の全国大会で「天」に輝いたかつ子さんの句である。かつ子さんは昭和五十四年に水明に入会されて、楽しみながら、懸命に俳句に向き合ってこられた。長年俳句を詠まれておられるが、今でも掲句のような端端しい句を発表されて、常に皆様の共感を集めている。それが今回の「かな女賞」の快挙に繋がったと確信している。

かつ子さんと初めてお会いしたのは、昭和の終り頃に私がおそるおそる柿の木塾に入会した時だった。そして、平成六年に三代目主宰星野紗一先生に、かつ子さん、内田恵子さん、節代・部の三人が行事部の手伝いを命じられた。水明誌に「行事部見習」と発表されて、水明の皆様が大いに笑われた。わが家では「行儀見習」と思われて、俳句は行儀まで教えてくれる、行儀の悪いのがバレたねと笑われた。しかし、一年後に

晴れて見習を卒業して行事部員になれたが、後にも先にも見習が付いたのは三人だけで、他に誰もいない。

行事部には、故戸沢可伊さんがいらして、四人でつるんでバス旅行やら色々な会に、手伝いと称してうろうろして楽しかった。残念な事に、四年程で私は行事部から編集部にトレド下されてしまったが、かつ子さんはその後二十年以上も行事部を支え続けて頼もしい存在であった。

斜に構へたるお見合ひの春袷

マネキンの飛天のやうな春着欲し

紅絹ほのと見ゆる袖口風の盆

かな女賞受賞の全国大会にかつ子さんは着物姿で現われた。朝から着付けに行ったり、大変だと思ったが、何とかつ子さんは一人で御召しになったという。詩吟の免許皆伝の彼女は詩吟の会で着なれておられたのだろう。そして洋服と同じだからと身軽に立ち働かれるのにはびっくりした。当日のかつ子さんは単物の結城紬を品良く着こなし、二句目の飛天のよう優雅であった。

無鉄砲な漢が走る薄氷

鷹の舞さみしくなればなほ高く

山際を行つたり来たり狩の犬

山奥の柚だけの知る山清水

自然を詠むのは本当に難しい。鳥や獣、山野の事は、つい机上俳句になってしまいが、かつ子さんの自然詠は、臨場感があふれている。

かつ子さんのご主人はクレイ射撃でかつて二度も国体に出場されたとか。狩猟がご趣味で、今でも朝早くから猟犬を車に乗せて、栃木や福島のお出かけになり、その折、かつ子さんも便乗して山に行かれるという。ご主人が狩猟なさっている時は、別行動で鳥を見たり、花を愛でたり、山にとつぷりひたり句材を集められる。故にかつ子さんの自然詠は絵空事でなく、裏付けがあるので共感を得るのだと思う。

母の手はごつき農の手鎌馳
福寿草似すぎし母に会ひたくなし
言ひかけて言へぬ一言若葉風

母と娘の関係を絶妙に表現。裏返せば母恋の句に他ならない。娘にとって、母とは頼りになる反面、自分が嫌だと思ふ部分が母に似て、そして自分の娘が自分に似てくるという、その微妙な心理描写が伝わる。しかし年老いた母には言いたい事も言葉呑み込むという三句目。母と娘は反目しながらもいつも気になる存在なのである。

裁縫箱の糸のもつれも夜の秋
クッキーに継粉の残る文化の日

秋日和お握りすべて規格品

秋日和のある日、かつ子さんは素敵なジャケットを着て現われた。これまでも、ベストやワンピース等々、色々なお手製の洋服を着ていらつしやるので、もしやと思つて尋ねるとやはりお作りになったという。結婚前に、洋裁学校、それもプロ養成の型紙を作る学校に学ばれたという彼女に取つては、ジャケットを作るのは何でもない事なのだろう。洋裁だけでなく編物さらに料理と何でも出来るかつ子さん！

二年前に水明の組織改正で、かつ子さんは二十年以上も尽力なさつた行事部から編集部に移られた。嬉しい事にまた、彼女と私は一緒に編集の仕事をしている。

編集部の作業の折にはかつ子さんは、趣味で作っている野菜を、それはそれは美味しく煮て、お持ち下さる。金平牛蒡、煮豆、蓮や里芋の煮物、栗御飯等々。本当に美味しく、編集部一同感謝している。御馳走様。

棟梁の女房といふ朝の虹

「水明」十月号の「華の一句」である。この素晴らしい句に主宰の素晴らしい評。どうぞ主宰の評をお読みになつていま一度、掲句のご鑑賞を。

かつ子さん、かな女賞本当におめでとうございます。

二百余年の藪椿

矢作水尾

かな女賞受賞おめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。心待ちにしておりましたのでこの度の受賞嬉しいかぎりです。

かつ子さんとは、「柿の木塾」「俳句の手ほどき」「歩の会」「珊瑚の会」と御一緒です。主宰のお誘いで、「俳句の手ほどき」に筆者は平成二十四年に入会しました。たまたまかつ子さんのお隣の席だったので、句からはじまり親しくいろいろと教えていただきました。

月に二回の「俳句の手ほどき」は十五名の多勢です。最初は、山中順子さんとかつ子さんのお二人で幹事をなさって、面倒をみて下さいました。しかし順子さんが亡くなられてからは、かつ子さんにはお一人で肅肅と幹事をして頂いて。本当にありがたく思っています。

水明にあつては、四十年の経歴で「手ほどき」以外の句会

に於ても的を得た回答をよせてくれます。やることは何でも早く、手際よく、俳句も適確に詠まれていらつしやいます。

家守る二百余年の藪椿
百年を継ぐ棟梁に冬の虹
ここだけは嫁の外持田稲運ぶ
来し方は煙のごとし白山吹
言ひかけて言へぬ一言若葉風
魂を抜かれしごとく灯蛾の舞ふ

これ等の句はかつ子さんの生活が見えるようです。かつ子さんは若くして旧家に嫁ぎ、工務店経営の御主人を助け、住み込みの職人さんの食事の支度等をなさったとか。
現在は職人さんのお世話もなくなったそうですが、かつてはそんな中で句材豊かで適確な句を詠まれています。

農の衣のがばがば乾く冬隣
母の手はごつき農の手鎌馳
秋晴や畑に携帯ラヂオ鳴る
風呂落す声の限りをつづれさせ

実家も嫁ぎ先も畑に親しむ生活だったのでしょう。新鮮な

野菜を収穫し、すぐにお料理を作る様子が伺えます。

秋日とお握りすべて規格品

山際を行つたり来たり狩の犬

風薫る犬に格付されてをり

墨糸のするする伸びて五月晴

釣竿を肩に少年朝曇り

折をみて御主人の趣味にもおつき合っているかつ子さん。

揃ってお元氣だからこそ仲睦まじく狩に行けます。犬もさ

ぞや喜んでいることでしょう。

紐育まで地球儀廻し冬うらら

山に川に次は紐育ですか。

いろいろと趣味をいかしているかつ子さん。詩吟の時は着物でゆくと聞いていました。今年の全国大会の晴れ姿も着物で、そつなくゆとりある着こなしで来客の接待をしていらっしゃいました。立居振舞素敵でした。

母の着物解く一日一葉忌

洋裁和裁を身につけているかつ子さん。お母様の亡きあと着物を整理されての句と思われれます。かつて筆者もこの様なことをしました。

手ほどき会場の公民館では「絵手紙」の教室があり習得されたようです。程よき時季に俳句に添えて絵を描いて送って下さいます。

ぬくさうに枯れてゐるなり茸の原

藁苞の中に地のもの寒厨

木通の実夕日の色に磨かれて

そこはまあ少し譲歩の芋煮会

木の実コロコロ着地の場所を探しをる

句材豊かな岩槻の街でかつさんの句は生活に直結した豊かな句が多い。主婦、畑仕事、工務店を支え、悠悠と水明俳句に専念されその上編集と運営幹事もなさっています。

次の句は、今年九月のりんどう忌で、主宰に超特選を頂いた句です。

川添ひの黒幄長し秋の水

心より「かな女賞」受賞お喜び申し上げます。

石山かつ子 の一句



春寒や個々に母あり無言館

長野県上田市にある「無言館」は戦没画学生たちの美術館です。ちよつと不便な所にありますますが、機会を得て私も二度ほど訪れました。掲句を読んでその時の感銘を今、鮮明に思い出しました。将来を嘱望されながら、学徒出陣を余儀無くされた無念さは如何許りであつたでしょう。母を画き、恋人を画いた命の絵の前に、観る側の私たちは言葉を発することなど出来ません。肅然たる館内にただただ立ち尽すのみです。そして、個々に母ありと詠んだ作者の思いが胸に迫ってきます。折しも、ロシアによるウクライナ侵攻のただ中にある今、心揺さぶられる一句なのです。一日一日を大切に生きよう、そんな事を強く心に刻みました。最後になりましたが、此の度の名誉あるかな女賞受賞、ほんとうにおめでとうございます。

そこはまあ少し譲歩の芋煮会

芋煮会の場合は里芋であつて、東北地方で盛んに行なわれる秋の行事の一つです。地元でも里芋の採れる十月ごろ茸や地元の野菜を沢山入れて芋煮が出来上ります。家族や町内会などのグループで芋煮会を楽しみます。

その芋煮会に対して意見の違いや時には不満も多少はあるかも知れませんが、そんな時に「そこはまあ」の一言で譲歩もされ、責任者の信頼の深さと人柄の良さが立派に会を納めたのです。この作品から楽しい芋煮会の様子が手に取る様に浮き彫りとなり、情景が見えてきます。作者の人柄の良さとしっかりとした写生のうまさが生実感のある俳句となり、私が芋煮会の中に居る気分になったのも、作者の俳句の魅力のなすばらしさです。

内田恵子

木の実コロコロ着地の場所を探しをる

はつとさせられる句である。なにげない情景を詠んで重い課題をぶつけている。

散歩していると、木の実が足元に降ってきた。どこへ行きたいのか、何処まで転がるのかと追い掛ける。誰れでも知っている童謡「どんぐりころころ」では「おいけにままってさあたいへん」

どこに着地するのかわで木の実の一生は大きく変る。池の中や溝に落ちたらそのまま朽ちるだろう。道路に飛び出せば、人に踏んづけられたり、車に押し潰される。森の中などに運良く着地できれば、やがて芽がでて大きな木になれる。どんぐりなどの固有名詞でなく木の実としたことでみんなが同じ場所がベストとはかぎらないことを示唆している。

着地場所を探すということはすなわち終活である。皆よりよい着地場所を見つけないと思っている。

大塚茂子

墨糸のするする伸びて五月晴

墨糸とは、墨壺についている糸、大工さんが直線を引くの用いる道具です。

真つ新たな木材に真つ直ぐ伸びる墨糸、張り詰めた空気を切るような「ピシッ」と微かな音で、確かな直線が引かれます。その空気感と五月晴の取り合せが気持ち良く響き合います。鉋の歯を微調整する「カンカン」と鳴る音、紙より薄い鉋屑のしゆるしゆると削られる音が聞こえます。

私は子供の頃筆筒を造る職人の家に良く遊びに行きました。その景を思い出してとても幸せな気持ちになりました。

かつ子さんは、大所帯の石山家に嫁ぎ、棟梁の御主人を支え、家事子育てを熟して、畑で季節の野菜を作り、本当に忙しい日々を過ごしてきたようです。そんな中で詠まれた俳句を選んで頂きました。編集部で一緒にお仕事をしています。これから宜しくお願ひ致します。

小倉倭子

老いてこそ華やぐごとし春の風邪

かつ子俳句の骨格を成す自然と現物との確実な係り合いの基は、これまでの豊かな生活環境から育まれた俳句たる俳句。季語の設定が適切で確実、が、近年になり心象が浮き上がり、かつ子俳句の変化に魅せられている。

季語を軽妙に用い句柄を楽しませてくれる。この掲句の一句も季語の斡旋が巧を生み、揶揄の扱いがユニークに詠まれていると思う。

一行詩でここ迄雰囲気齎す表現力はかつ子氏本来の心の豊かさであろう。

「こそ」が有効的に使われていることに感心すると同時に比較、強調の語彙が生かされている。「老いてこそ」は若い時世だった頃よりもという比較を指し、老いてからの他愛ない噂話に一喜一憂する華やぎは、春の風邪のクシャミミとしてある。若い人の春の風邪だったら華やぎで済まされないのである。「如し」俳句も、ここ一番という意味合いで活用しかつ子俳句の実力ここに有り!!

母の手はいつき農の手鎌颯

太平洋戦争前後の長く困難な時代を生き抜いた母の手は、厳しい農作業と気忙しい家事に苛まれて、黒く節くれだった農の手そのものであった。しかしそれは時として気弱な子らの背中を押し、風邪で寝込んだ枕元に玉子酒を運んでくれる優しさ溢れる愛の手でもあった。

季語の鎌颯は物に触れても打ちつけてもいないのに、突然切傷のできる現象で、昔は颯の仕業と考えられていた。全国の寒冷地、特に信越地方に多く、信州生まれの筆者の左膝にもくつきりと鎌颯の傷痕が残っている。原因には諸説があるが、現在では皮膚表面が気化熱によって急激に冷やされるために、組織が変性して裂ける生理学的現象で、「あかざり」の一種であると考えられている。

掲句は母の手に絶えなかった苦労の象徴である「あかざり」と、地方の怪異現象であった「鎌颯」を共鳴させ、貧しくも心豊かだったあの時代を偲ばせる作品となっている。

農の衣のがばがば乾く冬隣

中七の措辞の巧みに瞠目する。擬態語「がばがば」の効果抜群である。音感はや趣そのものながら、木綿であろう農衣の質感は勿論、晩秋の乾ききった季節感を端的に表現する。その上読み手は、農衣を着る人の一途な農魂までを勝手に酌み取ってしまう。

季語「冬近し」の傍題である「冬隣」の採用も成功要因。写生を超え、作者特有の農へのオマージュが句に纏っている。

擬態、擬音の所謂オノマトペは安易に使用すれば陳腐で凡庸な句になってしまう。

しかし言葉の選択に成功すれば既存の修飾語にはない抜群の効果を發揮する。言葉探しの楽しみではあるが作者の個性に因るところが大きい。お手本としたのだが二度出しが効かぬのがオノマトペである。

クッキーに継粉の残る文化の日

「継粉」とは粉を水などで捏ねる時、捏ね切れずに残ってしまう小さなかたまりで俗に言う「だま」である。買ったクッキーに「だま」があったら、いい気はしない。しかし、掲句は季語に「文化の日」とある。これは公民館などの文化祭の催しで地元の自治会や小学校のPTAの役員さん等が焼いたクッキーであろう。だまがあったり、少し端が割れたりしていてもそれは愛敬、きれいな袋に入れてリボンをかけて、それなりの値段で売られる。もちろん完売である。

筆者も以前、公民館の文化祭に毎年参加して人形劇をしたり、五目寿司やクレープを作って販売した事がある。クレープを薄く丸く焼くのは簡単なものではなかった。バナナを包んで、袋も手作りした。楽しい思い出である。こんな文化祭もコロナで今年も中止となった。寂しい事である。

町野 広子

老いてこそ華やぐごとし春の風邪

先ずは「かな女賞」おめでとうございます。珊瑚の会でご一緒させて戴き、はや二十六年あの頃は皆五十代。何をやっても楽しく、活気に溢れていましたね。今回、数多の秀句の中から、掲句を選ばせて戴きました。

「春の風邪」の季語が、深刻ではない状態を想像させる。「老いてこそ」と自らの老いを認めつつも「こそ」のあとに続く「華やぐ」が、若い人には味わえない深さを伝える。何となく熱っぽく目は潤み、鼻声にもなる普段頑丈な妻や母が不調になると、家族は気遣いを見せ、本人は思わぬ幸せを感じる。春の風邪とは、そんなもの。豊富な人生経験、生活の知恵、子育てを終えた安堵感そして、多くの友。老いる事で得る楽しさや華やぎはやはり「こそ」なのである。

労を惜しまぬ軽いフットワーク。誰にも優しく又、我慢強く、常に信念の人である。今一度、かつ子さん、おめでとう!!

丸山 マスミ

ここだけは嫁の外持田稲運ぶ

「外持田」辞書によると「小作料を取られない田」「家族の中で個人的に所有する田」。嫁や隠居が小遣いを得るために耕すもの」とある。このお句の場合後者の意味であろう。この言葉は以前作者のかつ子さんから教えていただいた。慕わしい言葉である。

このお句からは、いそいそと稲を運ぶ農婦の姿が目には浮かぶ。慣れない嫁ぎ先で大家族の世話をしながら、苦労を重ねて嫁の座をしっかり確立したお嫁さん。その証拠が家族から認められた「外持田」。忙しい時間を割いて自分専用の田を丁寧に管理。立派に稲を実らせ出来たお米は、筍御飯、大豆御飯、栗御飯、あさり御飯、お赤飯などなど、季節毎にお祝い事に食卓に乗せ、暖かい和やかな団欒の輪ができる。筆者にはとても真似の出来ない「嫁」の理想像をかつさんの日常に垣間見ている。かな女賞おめでとうございます。

茂木 和子

秋日とお握りすべて規格品

秋の行楽シーズン家族で、グループで又は一人で句作の旅に出るのも良いでしょう。天気は上々、気分も上々コロナ籠りを続けていた気分を一気に吐き出しましょう。この句からはそんな楽しい開放感に溢れた光景が浮かびます。しかし「:すべて規格品」が時代遅れの私にとっては何とも淋しい限りです。

昔のお握りの型には俵、丸、三角大きさも大小様々、具材も梅干が主で、昆布、塩の強い焼鮭の解したもの等、又何も使わない単なる炊き立て御飯の塩結び、そして少し冷めた御飯に味噌をつけた味噌握り等どれも美味しいものばかりです。握った人それを食べる人の顔や仕種が見えて来るとも楽しいものです。作者は充分昔のお握りの顔も味も知っています。そしてそれを食する人の笑顔も。

時代の流れの早さに全てが簡略化、機械化等に依り口に入るものまで機械に支配されている昨今、敢えて「規格品」と言い切った作者の思いに同感しました。

俳誌望見 梅澤佐江

「玉梓」 令和四年九・一〇月号 通巻一〇一号

主宰 名村早智子 発行所 京都府京都市

平成一八年一月、名村早智子が京都で創刊。師系山口誓子、津田清子。誰の心にも詩があることを信じ生活を深く詠む。

〔隔月刊〕
主宰吟「銚の辻」一五句より

次々に開く銚蔵 七月来
膝ついて帯結びやる子の浴衣
夕蟬やうしろ手に帯直しみて
射干や静かに灯る杉本家
銚の辻 東西南北灯の入りて

コロナ禍 三年振りに復活した祇園祭、人々の心に活気を齎し、この祭の疫病退散という切なる願いが八坂神社の神に届くよう心が願うばかりである。一句目、銚蔵が次々に開かれていよいよ一大ページエントの幕が開く七月が来た。二句目、待ち侘びていた子供達、小さな子に合せて膝をつき浴衣を着せ帯を結ぶ母の親心、母子の情景が目に浮かぶ。三句目、朝から立ち働く女性、夕蟬と共に宵山の刻となる。後ろ手で然りげ無く帯の崩れを直す所作に嫺やかさと艶、しつとりとした情緒が漂う。四句目、中心部にありながら閑かな佇まいの元呉服商の本店、杉本家住宅では宵山の期間、秘蔵の「屏風飾り展」を開催、煌びやかな金屏風から美しい花鳥画まで飾り付けた座敷が開放されており十分に堪能された作者。庭先の射干の花が明かりに映えて美しい。五句目、祭の

ハイライト山銚巡行である。東西南北の家並には灯がともり、辻回しの列を今や遅しと待つ見物客。コンコンチキチン、コンチキチン、祇園囃子が近づいて来る。
真朱集 主宰選 二三名 各七句より

紫陽花に月光の色加はりぬ 井上恵美子
花種蒔く戦禍の国を憂ひつつ 房安栄子
蛇出でてすぐに探すや隠れ場所 藤田啓子
萌黄集 主宰選 一三名 各七句より

紫陽花のよろこぶ雨となりにけり 田中澄子
母の日や母がいつでも待つてある 蔵澄絹枝
子には子の約束のあり子どもの日 森下哉美
玉梓集 主宰選 一二五名 各五句より

千年の枝ぶり確と楠若葉 斉藤 忍
汗ひとすぢ重りのごとく背を伝ふ 坂本 牧
もう限界筒土を割りにけり 坂梨喜久子
学生・子どもの部 同人選 七名

窓開ける朝の一声ほととぎす (高3)長石 凜
風呂に入る日焼けの跡がトゲをさす (高1)長石 駿
ずぶ濡れの自転車拭いて梅雨の朝 (高1)岡田結衣
蝉声にブラバンハモる雲の下 (中3)名村颯馬
母の日にありがとうのメッセージ (小6)仁科 道
がまがえる前だけ向いてあぶないよ (小4)森下哉太朗
パインアップルは魔法の果実元氣出た (小4)仁科 真
皆様の御句に、詩心を大切にという主宰の信条が息衝いて
いらつしやると感じました。

山本鬼之介 選

水明集

さいたま 梅澤輝翠

真鯛の顎つき出して干されをり
善悪を猫に教ふる秋の暮
台風ちゆうふうの去り庭下駄の行方かな
望潮もちしほに舟を出したり鯛雲
流星や姉の見合ひの整うて

秋の田のむせるほどなり無人駅
束にしてなほ美しきかな秋の草
真青なる海を泳ぎし鯛焼く
台風ちゆうふうの怒り狂ひて街を行く
白式部の望みは一つ紫に

菅原真理

さいたま 篠崎紀子

星の降る民話の里や西鶴忌
遠い日を反芻させる西鶴忌
森が消え芋虫の孵化遠くなる
木鐮の快音つづく秋の昼
軽快なブラスバンドや秋の空

川口 新井のり子

絵馬堂に今が極みの小望月
待宵や易者静かに未来告ぐ
待宵の戸ごとの灯り狐色
秋涼し隣家の声も独りぼち
いびき声ひと間を支配秋深し

上尾 横山君夫

「はやぶさ」も空の旅人流れ星
線路工夫どかどかと来て夜食かな
大粒の葡萄や舌の溺れさう
遺作展出て秋風と帰りけり
古時計のネジ巻いてみる敬老日

さいたま 渋谷さいち

芋虫を挟んで捨つる違ひ箸
たこ焼に楊枝が二本西鶴忌
国ざかひ糲殻焼に歩を止むる
老ゆるとは快きこと山粧ふ
鶏頭の朱を落さんと俄雨

芋嵐電話の先に「そうだんべ」

黄金の国ジパングを黍嵐

蓑虫や風来坊の浪花節

蟪蛄の恋やお七は丙午

父母の愛なき嬰兒星流る

団塊の快活クラブ馬肥ゆる

句に遊び色に遊ぶや西鶴忌

葉鶏頭妖しく誘ふフラメンコ

彼の国の戦火のほひ曼珠沙華

鶏頭や色濃き紅の女大将

諸蔓を手繰れば重し火山島

秋野行く八十路の友の花凶鑑

はちきれさうに梨も農家の娘らも

猫よぎる秋草の縁取る小道

夕顔の重きを支へ棚に網

三味の音をじつと聴きある西鶴忌

水を打ち客待つ暖簾西鶴忌

切通しぬけて真紅の鶏頭花

車椅子より高く伸びたる雁来紅

鶏頭や出雲の阿国いまあらば

さいたま 染谷正信

後二日収穫前の梨落下

台風の日や奈落の底をのぞくごと

秋草に寄り跪くカメラマン

アスリートの善戦の顔大拍手

稲田の畦をいそいそ歩く老農夫

さいたま 西幅公子

新 暦文

平塚 丸屋詠子

早起きし清秋の気を胸に入る

見事なる女帝のライフ桐一葉

想ひ出のエチュードを弾く秋の昼

亡き人の文読み返す虫の秋

越 谷 阿部幸代

さいたま 反町 修

露けしやのべつ草食む牧の牛

学舎や銀杏黄葉の晴れ姿

撮り鉄の三脚揺する芋嵐

弱きを助け強気を挫く菊人形

蓑虫の独りで生くる矜恃かな

新涼や細道行くもまた一興

稲穂垂る三三五五の通学路

さあ九月疲れし五感呼び戻す

風そよぐ畦のくれなる九月来し

熊 谷 越田栄子

托鉢の休らふ野みち葛の花
やや丸き庭師の背中柿紅葉
秋彼岸仏間に残る痛みかな
玻璃弾き早や初時雨伽藍堂
痛快な映画観終はり新豆腐

さいたま 元田亮一

かな女全集時巻き戻す秋思かな
秋の夜や句集に潜む江戸気質
秋草を掻き分け辿る地藏堂
色草や天使の零す金平糖
「支那の夜」秋思よ「ラジオ深夜便」

さいたま 清水桂子

幾何の問灯火親しみ解き明かす
産声の主は男の子や天高し
里の夕四圍を制すや虫の声
辞書といふ人生の友天高し
青年を支ふる母に萩の道

山岸久美子

鬼灯や人は故郷に帰るなり
ワンカップのこつと音して秋彼岸
園児らの予行演習罽雲
槽底の豆腐ゆらゆら秋日影
神楽鈴のごとく銀杏なりにけり

小林京子

秋遍路朝の馳走のかやく飯
句碑の前かるき会釈や赤蜻蛉
白芙蓉銘酒なれども猪口ひとつ
雨上り露座仏かこむ鶏頭花
螻蛄やマリオネットの幕が開く

池田珪子

あの頃はとふと口の端に夕化粧
都会派の糞虫粹を纏ひをり
良夜なり街角ピアノ流るる夜
一夜明けつぶと濡れをり捨案山子
龍田姫思ふがままに色を添へ

小山敦子

色事や元禄小袖西鶴忌
あの人嘘が誠に西鶴忌
鶏頭や簡易舗装の割れ目より
白菊や国葬と聞き首を振る
秋の蚊は意気地無くして影の中

新井孝磨

曲家の苦屋に掛かる秋簾
ビロードの朱の鶏頭花点々と
中庭へ君誘へば虫の秋
虫の闇今宵散歩をもう少し
二の腕にそろり寄りくる蚊の名残

加藤でん治

語彙の豊富な本読む夜や西鶴忌
パレットに色を思案の鶏頭花
びろうどや黒芋虫の洒落つぶり
しやがみ込む子らの目先に芋虫が
秋めくや快投快打二刀流

さいたま 鳴海順子

マネキンが句集を捲る秋の宵
図書館の司書が影絵に秋夕焼
分け入れば身の丈を越す秋の草
ふるさとの棚田隠すか秋の草
二番線新蕎麦啜る異邦人

さいたま 飯田忠男

痛点も圧点もあり蚯蚓鳴く
空よりも青き朝顔地に這へり
鶏頭花お地藏さまは二頭身
お堂より先は道尽く葛の花
菜を洗ふ水の手触り今朝の秋

本橋稀香

伊奈 菅原卓郎

手鏡にしばし目を遣る敬老日
秋草や古墨にのこる野面積み
具には名前言へぬが秋の草
かなかなに諸行無常を異邦人
秋草に恋を占ふ少女かな

もう少し生きてみたいと法師蟬
向日葵の金色けむる吐息かな
新涼や利根を吹きゆく風の音
友病むと切なき便り秋の風
コロナ禍に墓は黙して施餓鬼かな

杉戸 佐々木史女

気に入ればずっと留まれ渡り鳥
鳥渡る新顔多き水場かな
新米や心して炊く水加減
炊きたての新米盛るや秀衡碗
敬老日主役になれる良き日かな

さいたま 綿貫ひさの

炭酸のシユワーとはじけ土用入
土用三郎赤銅色の子の腕
土用波海の果てより押し寄せ来
残業の帰路の夕顔明りかな
夕顔や古文を繰りて夜の更けり

さいたま 後記朝香

料亭の黒き板塀虫の声
潮溜まり黄金に浮かぶ十三夜
柿紅葉綾取りの子が縁側に
猫じやらし膝に乗る子の長き髪
芒原軽飛行機が低く飛ぶ

湯浅 和

路地をゆく猫に品格京の秋
秋涼し伏見稲荷の茶屋の席
鴨川の映るは月か街の灯か
すれ違ふ緋色の帯や初紅葉
しづかなる満月の夜に高瀬川

さいたま 石関六弦

あの子今どこにゑのころ揺れ止まず
忽然と絹傘茸の失せし朝
忙しなく行き交ふ船や野分あと
揺れつつも手招く庭の吾亦紅
分校の遠出ここまで女郎花

伊予 向井章子

台風禍鯉干されゐる池の端
流星や展望台で酔ひしれて
秋草を御朱印帳の押し花に
鮮度よし樽に酢漬けの鯛かな
大漁やこつば鯛は鷗の餌

小川洋子

喘ぎつつ辿る秋暑の女坂
うたた寝の母の福耳白木槿
ままごとに飽けば影ふみ赤まんま
密を避け間合程よき鯛雲
よく撓ふヨガの先生いほむしり

さいたま 森美枝子

鈴虫に穏やかな刻過ぎゆけり
風に乗り風に向かふや渡り鳥
ビル街の喧騒沈み夕月夜
テントの灯消えて銀河に近づきぬ
濁流の砕く橋脚野分かな

岡田宣子

つくばひの舟となりけり今日の月
青臭く積まれてゆけり今年薬
月光を待たせてをりぬ山の駅
天高し鎌は実りを刈りたがる
天涯に水の音あり十三夜

古池恵里子

朝露のサドルを拭ひ登校子
虫の音を聞き分けてゐる眠れぬ夜
栗飯や仏の母に天こ盛り
木犀の村に一本金こぼす
秋の蚊の音をたてずに刺しにくる

若狭 山崎郁子

流れ星会ふことなしに人と人
週刊誌読むこともまた夜学かな
手を繋ぐ男女ばかりや秋の蝶
容貌は日々の刺青水の秋
秋桜夢に歩いてけふがあり

吉川拓真

地藏の顔ならば曼陀羅虫の秋
虫時雨いよよ佳境の捕物帖
鉦叩思ひの丈を書き記す
廢線の枕木をゆく雁渡し
祝ひの汽笛遠くなりけり雁渡し

川崎 鈴木玲子

秋色の大地ひたすらローカル線
娘に託す父母の形見や星流る
コンビニの夜食選りどり塾帰り
唐黍の朝採りを食む里帰り
菊人形谷中おせんに人集り

春日部 諏訪サヨ子

十三夜木曾の旅籠の円窓
芝居跳ね後の名月小挽町
金婚の浜をそぞろに十三夜
鈴虫や寄木細工のコースター
吾の書架居間の隅つこちちろ鳴く

さいたま 森 和子

大急ぎ願ひ唱へし流れ星
山の端に流星ひとつ落ちにけり
頑張つて徹夜覚悟の夜食かな
澄み渡る空に半月豪雨後
秋の風音なくしのび寄る値上げ

仲田利子

初さんま見様見真似の化粧塩
居酒屋の限定五尾の秋刀魚膳
秋刀魚焼く酒酌みながら見張り番
天気図の予想迷走九月かな
雨止みて庭に虫らのラブコール

緒方みき子

秋裕望み通りの出合ひあり
支へ合ひ暮せし日々や星月夜
持ち寄りて籠にいろいろ秋の草
最善尽くし夫逝き秋の三回忌
高原の風を感じて秋の草

さいたま 野村美子

風の盆やがて迫り来胡弓の音
鬼灯の鉢をお供に水上バス
辞書を閉ぢ夜食の温みかみしむる
大花火の粉降り来る河川敷
相輪に薄絹の雲秋澄めり

草加 外村紀子

旅客機の先を翔るや稲光
秋彼岸無縁仏に花と菓子
ふはふはと稚のほつべにすすきの穂
人気なく案山子の背に夕日影
絵漆の皿に老舗の栗まんぢゅう

武田重子

三味流る黒塀の家枇杷たわわ
サックスの低音響く夜の秋
共に書く終活ノート夜の秋
蟻螂や閑節伸ばすストレッチ
秋高し木遣一声谷渡る

さいたま 綿引まりこ

鉢植の生気を奪ふ秋早
新涼や駐車場から富士の山
秋の蚊を追ふ妻からの平手打
十六夜や棺の帰るバッキンガム
独り酒庭のちちろにご返杯

さいたま 鈴木藻好

登高や来し方はみな雲の中
思草悔いのしるべか道すがら
「もういいかい」と誰かに問はむ夕月夜
天高し中立の身の置き所
登高や天背負ひての無礼講

吉川 杉浦理恵

新米やお代はりの声大になる
新米やコロナに耐へて届けられ
鳥渡るルート知る技謎めきて
渡り鳥いつもの沼に降りたちぬ
涙する三年ぶりの大火花

小駒さち子

秋茜くるくる指とにらめっこ
秋の夕墨色になる空眺む
長き夜や負けず嫌ひの子とゲーム
秋の虹懐かしき人と再会す
長靴の陛下稲刈り平安に

東京 畑宮栄子

焼栗を上げて曾ての社宅訪ふ
手に余る巨峰を喰らふ浪人生
夜風過ぎ内氣に戻る秋ざくら
戯れにハーブを撫づる指に秋
帳面の真白に季語が爽やかに

大阪 遠藤人美

秋時雨瞬間動作降り込まる
秋暑し水墨仏画魅せらるる
学童の力作見入る秋の昼
秋の日や高野の土産豆腐なり
無花果や入荷のたびに足運ぶ

和歌山 南條きわゑ

孫のやうなる秋刀魚煙らせ夕の膳
髪はコスモス人体をなす花瓶かな
陳列に二度見の高値痩せ秋刀魚
次々と台風来る短期かな
毎朝の靴を揃ふる夏休み

さいたま 山戸美子

三代の似た顔揃ふ袖の庭
談話室の昔語りや葛の花
消えるまで見送るランブ良夜の路
良夜なり「たかいたかい」に伸ばせし手
良夜なり祝儀袋の墨香る

さいたま 橋爪さなえ

新米や今朝は土鍋で炊いてみる
新米やうきうきと鳴る電子音
水かきを広げ着水渡り鳥
長旅を終へて中州の渡り鳥
新刊の紙の匂ひや秋はじめ

さいたま 樋口元美

渡り鳥地球はいまだ青なるか
迷ひなき航路を行くや渡り鳥
巖かに飯盛る朝や今年米
代代の記憶を待み鳥渡る
右手左手声沼に満ち鳥渡る

横山礼子

秋の夜の星座新たに雨上り
ほろ酔ひの猫背きこぎこ秋の夜
夕波や花睡蓮をねむらせて
風波に縦横無尽赤蜻蛉
大淀の風の波受け虫すだく

大阪 飯塚智恵子

秋高し吊り橋くぐる渡し船
出陣ぞ蟪蛄見得を切りけり
蟪蛄や殺意察して草の中
渡り鳥一旦宙を舞ひにけり
秋の蚊の隠密のごと襲ひけり

秋谷風舎

花束の溢る葉月の大使館
薄雲をゆつくり脱ぎたる十六夜は
中秋や今日は祖父母の参観日
スマートならば買ふを躊躇ふ初秋刀魚
揺れ微か白磁の壺の吾亦紅

さいたま 斎藤みよ

送り主逝きても届く二十世紀
御朱印や秋蘭の群れ善光寺
ポートタワー大パノラマの秋の海
見はるかす豊の稲田や遠秩父
しやきしやきと梨のサラダや嫁料理

森下美智枝

台風来旅に進路に迷ひあり
台風圏陸にポートの所在なし
ひと粒で口いつばいの葡萄かな
きこの飯家人の多き頃のこと
朝顔のほほ笑み返し道すがら

東京 柳父はる

新米のとき汁白し音たのし
穂をたたる見沼田んぼの今年米
売店のだるま弁当秋の山
青い空ひようたん池に渡り鳥
夕暮れの海峡はるか鳥渡る

さいたま 木村るみ子

剪定の音に調ふ庭九月
再会の連絡のあり九月かな
秋刀魚焼く嫁は出産予定過ぐ
二代目の推しの秋刀魚や三尾買ふ
特大の秋刀魚は倍の音で燃ゆ

東京 飯室夏江

秋暑し念願の家見つかりし
引越しは同じ町内秋桜
秋の夜や間違ひ電話つきつきと
新涼や籠の止り木洗浄す
新涼や朝刊の音風のごと

和歌山 高橋満耶子

さくさくと果物食めり夜の秋
早朝の日課の散歩さやかなり
昼餉時かすかに聞こゆ虫一つ
敬老の祝ひ頂く身となりぬ
敬老の日のデザートはモンブラン

さいたま 高原和子

葛の蔓くるくるくると花呼びし
涙雨葛の葉裏をそつと見せ
見送りし子らの背中に月天心
石畳に紅き花落つ良夜かな
秋風を身にまとひしや散歩道

さいたま 鈴木香音子

そこここに収穫まぢか秋高し
踏切を待つ間に一句秋高し
螭螂と目が合ひそつと逸らしけり
法師蟬鳴けば鴉も声たかく
秋めきて盆栽展に足の向く

川島夕峰

かぶりつく孫の笑顔や水蜜桃
秋愁や五臓六腑のメンテナンス
秋の蚊や野良猫二匹保護猫に
巡礼の道案内は秋茜
辛抱と言ふ棒求め秋の旅

和歌山 嶋田洋子

庭先の白い小さな萼の花
虫の夜築百年の家に住み
赤とんぼ誰を待つのか首かしげ
青空にたわなに実るなつめかな
石段を明るく照らす彼岸花

鬼石 加藤ナヲ子

四年分まとめて詣づ秋彼岸
二三手を抜いて追ひ付く踊の輪
ライダールの会釈で躲す鬼やんま
酸味に身震ふ忘れをりたるにぎり酒
自然薯のむかご散らして根を採る

東京 水落守伊

鳥渡る古利根川の風見鶏
新米のおむすび甘し七分搗き
店先に居並ぶ子らや秋まつり
新米や八十八の手をつくす
白鳥の飛来を待ちし風蓮湖

さいたま 糸井しるく

名月も笑てくれろとおんぶ紐
良夜には庭の地蔵も足伸ばし
良夜には季語を肴に回し呑み
ぐいと呑む腹の底から良夜かな
長き夜やくたびれてをりお互ひに

草加 持永喜夫

庭園の隈無く青き良夜かな
明かり消し古きジャズ聴く良夜かな
葛の花巴御前はかくありや
野分だつ何やら心ざわつけり
秋刀魚細し「魚辰」の閉店淋し

岡田芳春

空高しやけきの幹の苔光る
秋高の都庁舎の窓空の色
バリトンの歌声響く秋高し
母の声高し今夜は土瓶蒸し
塩ゆでの枝豆の香や深呼吸

さいたま 鈴木敦子

屋敷林処々に秋の田遠筑波
風に載せ秋の田伝ふ豊穰を
老父母の家は黄昏梨を剥く
初秋に開く恩師の追想集
文を書く虫のすだきに包まれて

宮代 関谷多美子

手を合はす祈りの背に盆の風
法師蟬急げ急げと声高く
感けるや気をとる直す竹の春
秋高し空を引きつれ気球飛ぶ
かまきりや出合ひ頭の仁王立ち

奥山粉雪

朔風に武蔵野平野おどろきぬ
犬たちの散歩にあくる去年今年
母さんの目つむり長き日向ぼこ
樅の木々ささやいてゐる聖夜かな
ひと文字の季語幾つ有る炉を囲む

所沢 関根千恵

諸ふも開きて閉ぢし秋扇
さういへば吾亦紅の絵秋扇
来年は来年の色秋扇
狐でも潜んでゐさうに彼岸花

見上ぐれば葛の落花とわかりけり
夕陽あび利根の河原の花野かな
足ならしゆく小流れや糸とんぼ
ひららひと黄色く舞ふや秋の蝶

入隊を待ちし彼の日や敗戦日
野分にも泰然自若施設かな
車椅子子に教へられ吾亦紅
紫陽花や花なきあとも朝の友

「はさみ菊」手に父忍ぶ秋の夜
芒束フォックスフェイスと並ぶ店
片手にリモンコン片手にワイン秋の夜
穂芒を舞ひあげ走る競走馬

とりあへず横になりたや敬老日
もらひ風呂急ぐ夜道や虫しぐれ
淡々と今世を生きて敬老日
天窓にまたたく星や虫しぐれ

敬老の日に手をつなぎ踊ろうよ
見沼田の風と戯れ秋桜
遠太鼓心そはそは踊りをり
人影も波に吞まれし秋思かな

東京 山中いちい

鬼石 榊原聰子

川村 治

北出久美子

山下ユリ子

さいたま 福田育子

十三夜憂ひをおぶる令夫人
松虫やちろりちろりん恋遊び
露地裏に交はす虫の音合唱隊
十三夜夢の彼の人遠かりし

力あり吹き抜けてゆく野分かな
野分来て鳥まなこ閉ぢ堪へゐたり
野の中に我を和ます吾亦紅
産土の紫蘇の実届く食卓に

蝉声の途切れず寺町開かず門
盆踊の寺に笑顔の六地藏
丘の上観音の笑む盂蘭盆会

茸飯炊けど浮かばぬ句会前
種々茸干し高めたき骨密度
天高し紅の乱舞や巾着田
秋の風感謝をしつつウオーキング
秋高し背中丸めて老農夫
秋高し白線消して万国旗

向日葵のブーケを胸に祝卒寿
喧噪に紗を掛けるごと網戸かな
泊り客明日のハンカチ洗ひをり

さいたま 落合和枝

染矢峯雄

藤沢 藤田寛二

さいたま 小田美智

さいたま 篠原さよ子

伊藤保子

☆ ☆

作品評

山本鬼之介

なして大海原を泳いでいたこの鰯が、大魚に食われることもなく、今ここに居ることに感激しているのであろうか。掲句を読むとそのような気持ちになってくる。

筆者が水明に入門して間もない頃、真鶴の民宿での吟行句会に参加したことがあり、日の出前に出港の漁船に同乗させてもらった。その時獲れたぴちぴちの鰯を宿で食した感激が、今なお脳裏に残っている。

木鉄の快音つづく秋の昼 篠崎紀子

庭師が入り庭木の手入れに余念が無い。身も心も蕩かすような陽が燦燦と射し込む縁側の長椅子で読書している作者の耳に、木鉄の音が届いてきて、その快いリズムにしようとうとしてしまう。

テレビコマーションシャルでお馴染みの電動剪定器具を使って仕事するプロ職人が多くなってきた昨今であるが、やはり木鉄を使つて思い通りの形を作つてゆく庭師の繊細優美な技を存続させてほしいと思う。

待宵や易者静かに未来告ぐ 新井のり子

翌日の十五夜の月と見劣りしない陰暦十四日の月の夜である。街頭で暗く小さな灯火で客を招く易者であろう。居酒屋から出てきた酔客が冷やかに立ち寄るくらいで、減多に客

望潮に舟を出したり鰯雲 梅澤輝翠

望潮は、陰暦十五日満月の日の潮を意味する言葉で、その前後の日よりも潮が最も高くなると言う。新潟県村上市岩船出身の作者は、出生してからその地で育ち、そこを離れるまで日本海を目の前にして日々を過ごした訳であるから、当然のことながら海のことを熟知している。これまでも作者の海の句に触れることが多かった。

さて、本句について筆者なりの解釈を述べるならば、満月の夜に港を出て行く一艘の手漕ぎの小舟が眼に浮かんでくる。夜釣りかそれとも他のことか、その目的は何か。満月に映し出された鰯雲が、昼間とは違った情趣を添えてこの舟を包み込んでいる。その不思議なロマンに憧れる。

真青なる海を泳ぎし鰯焼く 菅原真理

眼の玉が黒く身に張りのある鮮度抜群の鰯を焼いている。程よく煙り食欲をそそる香ばしい匂いを出している。群れを

が付かない。そろそろ店仕舞いしようかと思っていたら、中年の女性がやや躊躇うようにやってきた。待ちに待った客に歓びの顔を火影に隠し、徐に椅子を勧める。客の話を聞きつつ天眼鏡で手相を探りながら重々しく応えてゆく易者であるが、果して、易者が告げた客の未来は吉か凶か、興味の湧くところである。

線路工夫どかどかと来て夜食かな

横山君夫

不使用の線路はともかく、使われている線路の工事は、列車が運行していない時間帯即ち深夜から夜明け頃までである。夜中の作業が一区切りついた頃に夜食が出る。監督者の号令が掛かり、力仕事で腹を空かせた工夫たちが作業テントに集まる。「どかどか」が、その人数と履いている安全靴の重量感、そして、夜食にありつく喜びを具に表現している。

たこ焼に楊枝が二本西鶴忌

渋谷きいち

今では蛸焼が全国区になっているが、元来は関西特に大阪の食べものであったようだ。楊枝が二本ということは、二人で蛸焼を食べていることになる。季語の西鶴忌によって、その二人が男女であることを暗示しており、織田作之助の小説「夫婦善哉」のぐうたら亭主と男勝りの女房のような二人を思い描いてしまう。二世代前の昭和に還ったような懐かし

さと暖かみに包まれた俳句である。

黄金の国ジバングを黍嵐

染谷正信

マルコポーロの「東方見聞録」に書かれた「黄金の国ジバング」は、今や借金大国に様変わりしてしまったが、この一句によって元氣づけられたような気持になつてきた。言葉の魔力と言えようか。畑の黍をなぎ倒すように吹き渡る風に耐えているのが、まさに今の日本国の姿なのであるうか。

葉鶏頭妖しく誘ふフラメンコ

新 曆文

鶏頭が風に揺れている姿に、あの情熱的なフラメンコのリズムと動きを見出だしている。「妖しく誘ふ」を中七に置いたことにより、この語句が上五の葉鶏頭と下五のフラメンコの双方に作用しているので、一見してあっさりした表現でありながら両者の共通項が確りと読者に伝わってくる。

はちきれさうに梨も農家の娘らも

阿部幸代

収穫期を迎えて忙しい梨農家の様子が伝わってくる。祖母・両親・子供らの三世代総出で働いているような健康そのものの雰囲気を感じ取れる。瑞々しく生育した梨と娘は、この家にとつての宝物である。

水を打ち客待つ暖簾西鶴忌 霜多光代

代を重ねた格式のある料亭であろう。水を打った門の両脇にはきちっと盛り塩が施してあり、店の入口には季節にそぐわしい暖簾が掛かっている。女将をはじめ、仲居頭も板長もそれぞれの持場の部下を督励し、用意万端ととのつた。季語が、店のその日の臨場感を盛り上げている。

秋草に寄り跪くカメラマン 西幅公子

植物図鑑など専門的な書物に載せる写真を撮るカメラマンか。背の低い草花を撮るにはこのような恰好になるのは仕方なからう。逆の場合もあるだろうし、なかなか骨の折れる職業かと思う。数年前に、片栗の花を撮っていたカメラマンに出会ったことがあったが、背の高い人で、かなり苦勞していて気の毒であった。

想ひ出のエチュードを弾く秋の昼 丸屋詠子

子供の頃に習ったピアノの練習曲であろう。現在作者の家にピアノかそれに類似した楽器があればそれを弾いたことにならうが、そうでなければ、たまたま外出先にあったピアノを弾いたことになるだろう。いま流行の街角ピアノを恥ずかしそうに弾いている姿を想像するとぴったりの句である。

撮り鉄の三脚揺する芋嵐 反町 修

鉄道や列車の写真や動画撮影をする鉄道ファンを意味する「撮り鉄」のマナー違反やルール違反、迷惑行為によって発生する事故や列車遅延などの社会問題が深刻化している。この俳句の人は、格好良く走ってくる列車が撮れる穴場に三脚を据えて今か今かと待ち構えているのである。近くの芋畑を吹き渡ってくる強風が三脚を揺らし、撮り鉄くんを心配顔にさせている。

新涼や細道行くもまた一興 越田栄子

まだ残暑はあるものの、朝晩いくらか秋の兆しを感じるようになった日の黄昏時。家路につく自転車、何時もの道とは違う路地に乗り入れてみた。途中迷わずに帰れるか少々不安であったがそのまま進む。ちよつとした冒険を結構楽しんで無事帰宅した。

托鉢の休らふ野みち葛の花 元田亮一

町や村めぐりをした托鉢僧が、人も車も通らぬ農道でほんの一時の安らぎを求めている。傍らに葛の花が咲いていて、疲れた身体と心を癒してくれる。故郷の秋を想い出し、両親や兄弟、そして、友のことなどに思いを馳せている内に西空

へ日が傾いていた。

辞書といふ人生の友天高し 山岸久美子

本句を読んだ諸兄弟が少しばかり大袈裟と思うかも知れないが、考えてみれば、各種の辞書には己の識らないことがいっぱい詰まっています、一生かかっても覚えきれそうにない。であるから、作者が「人生の友」とした気持が理解出来る。日常における読書も結構だが、目的を持たずに辞書や歳時記を捲るのも俳句づくりに役立つと思う。思ってもみなかった言葉に遭遇するかも知れない。

秋遍路朝の馳走のかやく飯 池田瑠子

日数をかけての札所巡りで、楽しみの一つが遍路宿で供される食事ではなからうか。その宿ごとの料理は豪華なものではないが、お遍路さんを持たず心が籠められているのではないか。とある宿で出された加薬飯が実に美味しく、つい御代りする人もいて大人気であった。

鶏頭や簡易舗装の割れ目より 新井孝磨

屋外の駐車場や舗装道路の割れ目から雑草が生え出ているのを見掛けることがあって植物の逞しさを実感する。平凡な草なら驚くこともないが、真っ赤に燃えた鶏頭だとすると、

かなり注目を集めるだろう。この鶏頭はどうなったのだろう。

かな女全集時巻き戻す秋思かな 清水桂子

今年初秋に「長谷川かな女全集」を購入した作者が、秋の夜長に読み進めている様子が見えてくる。明治・大正・昭和を背景にした俳句や其れ等の時代の世相を反映した随筆を読んで、かな女の世界に少しずつ歩を進めているのかと思う。

槽底の豆腐ゆらゆら秋日影 小林京子

豆腐屋の槽に浮かんでいる豆腐である。「ゆらゆら」から推察すると、早朝に仕上がった豆腐が時間の経過と共に少なくななり、午後三時から四時頃の状態かと思う。西に傾いた秋の陽が豆腐屋の店先に射し込んでいる。

あの頃はとふと口の端に夕化粧 小山敦子

夕方から咲く白粉花の異称である「夕化粧」。「あの頃」の一言に思いが籠められている。浮世絵師の美人画を覗いているような気持になった。

虫の闇今宵散歩をもう少し 加藤でん治

夜の遊歩道を散歩していると、両側の草叢は今まさに虫の競演である。「頑張れがんばれ」と応援しているようだ。

水琴窟

(水明集十月号鑑賞)

池田雅夫

虹立ちて空に友禅流しをり 清水桂子

金沢の「加賀友禅」は、冬の浅野川の冷たい水で染めの工程ののりを洗い流すのである。また、京都の「友禅流し」は観光化され、八月初旬に行なわれている。雨あがりにくつきりと虹が現われた。情緒的な友禅流しの比喩に共感する。

虹立つや煌めく雨の止む気配 本橋稀香

「煌めく雨」の表現に魅せられた。雲の切れ間から射しくる日の光。だが雨は以前降っている。日光に透けて見える雨は光の粒そのもの。一方、太陽を背にすれば大きな半円形の虹。前方と後方を対比させたような表現を評価したい。

発破音蝉鳴き止みし石切場 向井章子

「発破」は、岩石に穴をあけ、そこに火薬を仕掛けて爆破すること。建築材料や石垣などの石材を切りだす石切場。山深い岩場である。時雨のように鳴きたてる蝉。その蝉が突然の発破音に鳴き止んだのだ。音の大きさを適確に詠んだ。

円虹を仰ぎ口笛歪みなし 新 曆文

高山の頂上で見られる「円虹」であるが、ごく稀にしか見られない。頂上を極めた達成感と重なり、言葉では言い表わせない。無意識のうちに「口笛」を吹いていたのだ。

滝音の誘ふ溪流石伝ひ 阿部幸代

間近に滝の音が聞こえてきた。轟音に誘われるように溪流の石を伝って登り始めたのだ。驚くほど溪流は涼しい。巨石を渡りゆくスリルを味わい、滝の迫力に圧倒されるなど、自然の豊かさを満喫されたことだろう。体もリフレッシュ。

夕立後石の鏡に映る空 小駒さち子

都会のビルやマンションなどの外壁、塀に多く使用される大理石やみかげ石。表面が滑らかで光沢がある。突然の「夕立」も去ってしまえば、また元の明るさ暑さに戻ってしまう。ほどよく濡れた石があたかも「鏡」のように街を映しだす。

隅つこの好きな金魚に餌落とす 森 和子

コロナ禍の昨今、外出がままならない状況で「金魚」やメダカなどを飼う人が増えているという。金魚は種類が多く、大小もさまざま。同じ種類の金魚も数匹になると強弱がはっきりする。弱いものは「隅っこ」や底にすることが多い。

涼しさや箱根峠の石畳 斎藤みよ

標高八百メートル余りの箱根峠。江戸時代に杉並木や「石畳」が整備されるものの、「箱根八里」と謳われた難所の旧街道。うっそうと繁る杉並木、石畳、そして高い標高、海からの風に歴史の風も加わり、夏でも涼しく感じられる。

荒磯や一瞬の虹立つ夕べ 外村紀子

波の荒い浜べが雨風でいっそう荒れている。夕方になってようやく雨があがる気配が見えてきた。西空の雲の切れ間からわずかにのぞく日射し。その一瞬、好運にも虹を見ることができたが願いを告げる間もなく、太陽が沈んでしまった。

しろがねの宝石放つ滝しぶき 関根千恵

「滝しぶき」を「しろがねの宝石」と譬えた発想を称えたい。水の表面張力により、雄大な滝もその高さで飛沫となつて落下する。マイナスイオンをたっぷり含んだ「滝しぶき」は水晶玉にも優る、まさに「しろがねの宝石」と言えよう。

もどり梅雨あわだつ波に三波石 柳原聰子

埼玉県神川町の神流川にある三波石峡。三つの波型の石が名前の由来という。「もどり梅雨」で増水した川に白く泡だつ波にただならぬ雨の降り方を危惧しているのだらう。

出目金のゆらり膨らむ金魚鉢 水落守伊

「出目金」は三つ尾なので動きが緩やかであり、人気が高い。ゆつたりした動きには丸い「金魚鉢」が適う。光の屈折で金魚が大きく見えたり小さくなったりもする。そこに気づいた観察力を称えたい。んくん、目の付けどころがいい!!

山里の校舎にかかる虹の橋 南條きわゑ

万人の心の奥にある原風景のような句。昭和の時代には山里も活気があり、子供も多かった。今では山里の人口も減り児童の数が数人だけの学校や廃校になったところも少なくない。「校舎にかかる虹の橋」にありし日を回想しているのだ。

汗光り辿り着きたる立石寺 緒方みき子

「立石寺」は山形県にあり、「山寺」として広く知られている。山門から奥の院までは九百段以上の石段があり、登るのも一苦勞。仁王門、根本中堂、芭蕉ゆかりのせみ塚、五大堂などを拝観し、やっと奥の院。「汗光り」は実感であろう。

窓辺にはモンローウオークの金魚かな 福田育子

部屋はどこにでも置ける金魚鉢。四方からも見ることが出来る。「らんちゅう」などの華麗な金魚の動きが「モンローウオーク」のように見えたのだ。譬えに独創性を感じた。

網野月を選

山紫集

秋の蚊や山の麓の無人駅

後藤綾子

秋の蚊や庭は隅より暗くなり

野口和子

ジーパンを取り込み秋の蚊に刺さる

木村るみ子

秋の蚊に愛の献血したる夫

荒井俱子

— 以上特選

秋蚊寄る内緒ばなしが聞きたくて

大塚茂子

秋の蚊のしぶとく生きて纏ひ付く

仲田利子

秋の蚊のぶんとも言はず去りにけり

横山礼子

噛みつきし作句の手元秋の蚊や

南條さわゑ

秋の蚊や神水絶えず湧く所

松宮保人

草むらにまだ待ち受ける別れ蚊よ

西幅公子

秋の蚊を打ちて眩しき夕日かな

丸山マスマ

秋の蚊や後継ぎの無き農夫去る

野田静香

ビル五階秋の蚊辿り着きて死す

日高道を

秋の蚊やしつこい痒さ掻きむしる

野村美子

意の人に付きて離れぬ蚊の名残

高島寛治

秋の蚊や若き肌のみ刺されをり

畑宮栄子

粋狂な秋の蚊を私の細腕に

原田 秀子

さあ吸へと秋蚊に足を差し出しぬ

元田 亮一

秋の蚊の纏はりつくやアキレス腱

樋口 元美

飛べぬ程身重の秋の蚊を叩く

本橋 稀香

秋の蚊の聴く人の無き武勇伝

檜鼻ことは

秋の蚊の未だ元氣や温暖化

森 和子

別れ蚊と思へど痒しいと憎し

福田 千春

秋の蚊や仏間に香の籠もりをり

森川 義子

酔つ払ひ刺したる秋の蚊泥酔す

藤澤 喜久

また生えた草と秋の蚊格闘す

森下 美智枝

渡月橋茶店に入る秋蚊かな

保坂 翔太

秋の蚊を追ひつめてゐるばさまかな

森本 早苗

秋の蚊の残兵と見ゆ血を吸はず

曲淵 徹雄

残り蚊に腕を預ける味なやつ

森美 枝子

飛蚊症に紛れ込みたる蚊の名残

正木 萬蝶

秋の蚊に好かれる私「やれ打つな」

山田 美佐尾

法要のさ中秋の蚊打てずゐる

町野 広子

溢蚊と思へば哀れでも痒し

山中 いちい

老骨に寄る残り蚊のあはれかな

松井 由紀子

払へどもふはと絡まる名残の蚊

湯浅 和

秋の蚊や一句も成就できぬ夜半

宮崎 紫水

残り蚊のふらふら飛ぶを打たずをり

横山 君夫

秋の蚊を腕にそつと払ひけり

宮崎 チアキ

秋の蚊の闇討ちや二の腕痒し

秋谷 風舎

秋の蚊やどっこい吾は生きてゐる	青木鶴城	秋の蚊を払ひそこねし庭仕事	井上玲子
秋の蚊の餓ゑに彷徨ふ夕厨	阿部幸代	秋の蚊や老いてますます乙女追ふ	井口俊晴
秋の蚊や目薬差して捕らまへる	新井孝磨	秋の蚊の千鳥足めく昼下り	上戸千津子
残る蚊や血玉孕みて低く飛ぶ	新 曆文	美女美男捜す秋の蚊ドラキユラ	内田恵子
秋の蚊の玉碎戦に腕を貸す	飯田忠男	別れ蚊のすがる眼 <small>まなこ</small> や痩せ臍に	梅澤輝翠
秋の蚊の季語失せるかに温暖化	飯塚智恵子	残り蚊刺すやせめて甘美か香を残せ	梅澤佐江
秋の蚊や淑女に秘し底力	池田珪子	やみくもに秋の蚊払ふ寝入り端	大場順子
秋の蚊のへつぴり腰を笑はれず	池田雅夫	秋の蚊を敲き子供のしたり顔	岡田宣子
秋の蚊の待ち受けてゐる蹶り口	石川理恵	刺せもせず「憐れ蚊」と母秋の蚊を	奥山粉雪
秋の蚊や払ふ棟梁釘銜へ	石田慶子	ひと雨のあとにふはりと蚊の名残	加藤でん治
秋の蚊や断りもなく食卓に	井関礼子	人なみで無いの同じ秋の蚊よ	川村 治
奥の院拜む手の先秋の蚊が	井上燈女	秋の蚊を払ひながらの庭いぢり	熊倉千重子

不届きな病の腕に秋の蚊よ

河野はるみ

家猫の狙ふ秋の蚊直ぐへたり

菅原卓郎

秋の蚊のふらりふはりと逃げおほす

越田栄子

秋の蚊や客と一緒に上り込み

菅原真理

秋の蚊に首筋辺り神楽坂

小林京子

秋の蚊や名残惜し気に指を吸ふ

杉浦理恵

秋の蚊や深夜耳もと暇乞ひ

近藤徹平

秋の蚊とひねもす過ごす畑仕事

鈴木藻好

耳元の秋の蚊忙し目覚めけり

斎藤みよ

秋の蚊に刺され赤子の何の其の

鈴木玲子

秋の蚊のゆるりととびて腕に来し

榊原聰子

秋の蚊や飛蚊症にも紛れをり

諏訪サヨ子

秋の蚊やふはつと来てもすぐ離れ

佐々木史女

裏庭の昼餉秋の蚊こゑ低し

関谷多美子

秋の蚊に付き纏はれし千鳥足

笹本啓子

秋の蚊の小さな奴程毒強し

瀬戸雄二郎

秋の蚊を潰すつもりが哀れなり

佐藤克之

耳元に別れ蚊のこゑ刺しもせず

染谷正信

もたもたと我が身老いたし秋の蚊よ

篠崎紀子

秋の蚊や断食明けの修行僧

反町 修

秋の蚊の這ひ蹲りて黄昏るる

渋谷きいち

耳元にかすかな気配蚊の名残

高橋満耶子

しなやかに庵主の払ふ蚊の名残

下川光子

残り蚊や叩く手の平赤き染み

武田重子

残る蚊に仏心で見逃せり

田中章嘉

秋の蚊にか弱きなんぞあるものか

寺内洋子

秋の蚊に鮮血といふ平手打ち

鳥羽和風

秋の蚊や夜なべの腕に音もなく

飛永 鼓

助手席の執念深き秋の蚊よ

外村紀子

山紫集作品評

網野月を

秋蚊寄る内緒ばなしが聞きたくて

大塚茂子

上五の季語「秋蚊」を擬人法的に扱って効果抜群である。やはり蚊は人間の生活に密着していて、犬や猫と同じように感情移入をして詠めるものなのであることが、この句からも判明する。また人間が蚊を認知するのは、多くはその羽音であるから、耳にフォークラスして句中の措辞を組み立てたところがこの句が成功した所以である。

秋の蚊のぶんとも言はず去りにけり

横山礼子

この「秋の蚊」は作者が見ているのである。蚊は先ずは音で認知することが多いと思われるが、秋になりゆつくり飛んでいる蚊は視覚の中でも捉えやすい。もちろん捉えたと思つ

たら、背景の色合いに紛れて直ぐに見失ってしまうのが常なのであるが。まあ、そのような理屈での解釈はともかく、「ぶんとも言はず」が読者の気持ちにスーッと入ってくるようだ。「秋の蚊」だからこそ句が成立している。

秋の蚊や 神水絶えず湧く所

松宮保人

作者は若狭町の方であり、いわゆる鳥羽谷の住人である。ということは句中の景は、若狭瓜割名水公園の瓜割の滝を創り出している湧水のことであろう。この湧水は、全国の名水百選に選ばれ、その中でも随一を誇るものである。だからこそ、神代からの名水伝説が起こり、「神宮寺」「お水送り」、そして遠敷の聖地である「鵜の瀬」という一連の聖辞が生まれたのである。作者はその聖地に「秋の蚊」を飛ばしている。この清冽な湧水に蚊がいるわけはなく、「秋の蚊」さえも有難さを慕って寄ってきたのだ、と解した。

秋の蚊を打ちて眩しき夕日かな

丸山マスキ

打ち取ったのか？はたまた打ったものの逃したのか？句は何も言っていない。通常ならば打ち取ったと解するところであろう。打ち取ったのならば、夕日を眩しいと感じたということになる。逃してしまったのならば、眩しいほどの夕日の映えに少しばかりの安堵感を覚えたというのである。つまり、打ち取ったのならば、少々の「秋の蚊」への憐憫を作者が感じたことになるだろうし、逃したのならば、夕日の中に淨い美しさを感じ取ったということなのである。

ビル五階秋の蚊辿り着きて死す

日高道を

兼題「秋の蚊」の数多御投句の中で最もシリアスな句ではなからうか。もしくは強い言切り、強い断定の句ではなからうか。テーマの「死す」についても同様である。他の出句はどうか殺さないでおこうとする句が多かったように思うが、この句はやり遂げて「死」んだ「秋の蚊」への敬意さえ感じるほどの句意である。ある意味で、作者の死生観が反映しているように感じた。

意の人に付きて離れぬ蚊の名残

高島寛治

何とも滑稽味溢れる句である。上五の「意の人に」は狙いを付けた人という意味であろうが、意中の人という解釈も出来る。そうだとすると、恋する人という解釈も成り立つであろう。つまり蚊が恋した人ということである。その場合は吸血は殆どが雌であるから、この「意の人」は男の人ということになるだろうか。

また座五の季語「蚊の名残」を使用することで、人間と蚊との関係性が浮き彫りになって、結果、滑稽味を演出することになったのであろう。「名残」は元々、人間が蚊に対して感じているものなのであろうが、蚊が「名残」を惜しんでいるようにも読める点が滑稽味を倍増している。

秋の蚊や山の麓の無人駅

後藤綾子

「無人駅」にいる作者と「秋の蚊」なのである。作者は蚊に人恋しさを覚えているのであろうか。句意は、秋の蚊が山麓の無人駅にいた、ということである。が俳句として表現すると、そこには作者の感情の揺れが読み取れる。「無人駅」に「秋の蚊」を見出したということがその時の作者の心の在

り様を表現しているのである。「お前はこんなところで何をしているんだ」と「秋の蚊」に語りかけつつ、その言葉は自問しているということなのである。

秋の蚊や庭は隅より暗くなり

野口和子

景の中に上五の季語「秋の蚊」を配して、中七座五の無機的な自然現象に有機的な感傷を与えている。座五が「暗くなり」ということなので、季語の斡旋は時候でも天文でもないのだろう。植物でもなく、どうしてもここでは動物が選択される。哀愁と少々のユーモラスを持ち合わせている「秋の蚊」の本意を十分に活かしている。

ジーパンを取り込み秋の蚊に刺さる

木村るみ子

「秋の蚊」は意外な時間帯に意外なところに出没するものである。句の景は夕方のものであろうから、いかにも蚊の出没する時間帯ではある。もの本には蚊の種別に依って、出没する時間や空間が異なるそうではあるが。このGパンを履いていたら刺されなかったかもしれない。

秋の蚊に愛の献血したる夫

荒井俱子

「秋の蚊」に同情する句意である。筆者の大学時代の座禅の師、確か円覚寺のお偉いさんだったが、は蚊に血を吸わせるくらいに慈悲心を持ちなさい、とおっしゃっておられました。「夫」は積極的に腕を出したのか、油断して刺された照れ隠しに、「愛の献血」だよ、と嘯いたのか。なかなかに捌けた性質である。もしかしたら作者ご自身のことを「夫」のことにしてしまったのか。

大村節代 選

鼓
笛
集

啄木鳥を近くに聞くや里の家
新米の匂ひ立ちくる里の家
後の月ひとり占めして里の家

加藤でん治

晩秋の駅早々に灯がともる
体操着のつつむ思春期運動会
秋晴に君の口笛野を渡る

杉浦理恵

文机の深き傷跡秋時雨
地下鉄へ駆け下りる夜冬近し
スコッチに舌湿らする夜長かな

元田亮一

台風に洗はれ木木の輝くや
街騒のかな女の句碑の秋思かな
コスモスの自由に遊び風キヤッチ

菅原真理

秋麗や手書きの便りいと嬉し
行く秋やスパイス香るレストラン
菊月や二十迎ふる吾子の背

丸屋詠子

狛狼を三たび見惚るる秋日和
神木の「氣」を存分に秋澄めり
山霧や夫と分け合ふわらぢカッ

越田栄子

朝寒や日の出を待ちて雨戸くる
朝寒や小さく手を振り見送りぬ
Tシャツを重ね朝寒路地をぬけ

篠崎紀子

利酒やUFO語る猛者二人
良夜かな絵本の中の姫いづこ
玄関に似合ふ小粋な万年青の実

綿貫ひさの

罽雲海なき里に大漁日

彼の岸の人の佇む花野かな

歩きつといよ影伸ぶ秋入日

菊人形弁慶踏ん張る衣川

縄文時代の地形そのまま暮の秋

行く秋や箆筒の晴着出番なし

奥入瀬の錦の川底秋高し

吹かれても風に抗ひ秋の蝶

お宮参り木犀の香の漂ひて

行く秋や夢二の宿に灯の点る

青空へ香り届くや金木犀

蕾多々やつと咲きたる藤袴

廢屋に生き生きとして草紅葉

太鼓台をすべて新たに秋祭

名月や今宵はたれの露天の湯

秋の夜脳トレパズルに精を出し

いきいき体操の窓辺に沿ひし萩の花

葛の花縦横無尽に蔓伸ばし

小林京子

茶は熱く菊の香高く外は雨
単線の駅を囲みて草のみぢ
俳聖の句碑ひつそりと草紅葉

仲田利子

食べかけの落ち栗もあり野に命
新生姜香りとともにとどきけり
秋空やあの雲に乗り流れたし

外村紀子

草紅葉高き塔婆の重々し
亀洗ふと繁盛するよ秋の夕
草紅葉ヘルスアップに挑戦す

小駒さち子

箱根山に抱かれ朝の零余子飯
バグパイプの音遠ざかる秋の虹
トランペット響く祝宴秋うらら

高橋満耶子

雨止んで風につゆ振る草の花
妬ましや折れて根を張る螢草
あぶれ蚊の風に乗りてはまどひ付く

畑宮栄子

朝顔の咲き誇りたる空き家かな
ゆりかごに花こぼるや金木犀
コスモスの丘吹かるれば色の渦

寺内洋子

榊原聰子

南條きわゑ

鈴木玲子

水落守伊

横山礼子

鼓笛集作品評

大村節代

啄木鳥を近くに聞くや里の家

加藤でん治

里の家で纏めた三句。この里の家とは、作者の実家であるのか、村里の家なのかとふと思ったが、どちらでも良いのである。里の家に、啄木鳥、新米、後の月を配した三句。なつかしさが伝わり、誰もが見た事があると錯覚する様な景を思い浮かべる。

秋晴に君の口笛野を渡る

杉浦理恵

晴れたある秋の日に、広い野原では、つい口笛を吹きたくなる。口笛を吹く少年とそれを追う少女と犬、居合わせた人ものんびりと見守っている。口笛が野を渡るの下語が気持ち良く、平和な日常が伝わる。

鼓笛集巻頭（十一月号）

私の好きな一句（自句自解）

池田瑠子

遠き日や虹消へぬ間の願ひごと

遠いある夏の日「あの虹が消えない間に貴方の願い事を三度唱えなさい。願いが叶うから。」と母に言われました。その時私が何を願ったか覚えてはおりません。多分母は私の末長い幸せを願ったのであろうと、俳句を始めた今思うのです。

地下鉄へ駆け下りる夜冬近し

元田亮一

終電車に乗り遅れまいと階段を必死に駆け下りるサラリーマン。お仕事お疲れ様。いやもしかしたら付き合い酒だったのだろうか。何れにしても転ばぬ様に。冬近しの季語が慌ただしさをより感じさせる。

句集喝采

近藤徹平

◆須田眞里子「横顔」

文學の森

著者略歴 昭和二十七年千葉県木更津市生。平成二十三年「好日」入会、長峰竹芳・高橋健文に師事。同二十七年「好日」青雲賞受賞。同三十年好日賞受賞、俳人協会会員。

高橋健文「好日」主宰は序に、著者は三人姉妹の末っ子として育ち大学以外は小中高とも地元の学校を卒業し、高校の同級生であった夫君と結婚し以後も木更津市民であると記す。

ひとむれのどこかに私翹雲
夏行くやいくつ拾へど忘れ貝
独白は消えゆくことば冬桜
横顔といふは正直夜の秋
残念な生き物にヒト春眠し
臆病なプライド透けて袋角
加速する終末時計蚯蚓鳴く
不確かないのち葉牡丹渦を巻き

第一句、海は常に著者の身近。第二句、忘れ貝を拾うと恋を忘れるというが成就する恋も。第三句、内心を曝け出す独白に冬桜を取合せ。第四句、句集の標題句、夜半眠る夫君の横顔には正直な心中が。第五句、人類を生物のヒトと突き放す妙。第六句、臆病なプライドとは複雑な心理の描写。第七句、最近のロシア・ウクライナ紛争に見る地球の危機感。第八句、人の不確かな命に冬に咲く葉牡丹を取合せ。次の句集も期待。

◆村上光代「夏空」

東京四季出版

著者略歴 昭和二十三年大阪府堺市生。平成二十一年NHK文化センター俳句教室入会。同二十三年名村早智子主宰「玉梓」入会。大阪俳人クラブ会員。俳人協会会員。

名村早智子「玉梓」主宰は序に、著者との初対面は組立て中の錚建であったこと、本句集は家族を詠み、故郷を詠み、四季折々の日本の風景を詠みつつ、世界平和を願うと記す。

ふるさとは古墳数多や桃の花
ふるさとは世界遺産に夏木立
根つからの阪神ファンや夏の月
白髪のお白寿の母や梅二月
吉野杉運びし川の花筏
漫才の稽古してゐる花の下
歳問はれ指一本を夏空へ
戦争は止められるもの秋の声
浮いてゐる地球の明かりクリスマス

第一句、第二句、著者の出生地は仁徳天皇陵等のある堺市百舌鳥地区。第三句、夫君はタイガース根拠地の大阪人。第四句、夫君の母堂は令和四年現在百三歳。第五句、俳人協会主催花と緑の吟行会で選者特選句。第六句、大阪俳人クラブ主催の吟行会で選者特選句。第七句は標題句、一歳の初孫のあどけない仕草。第八句、第九句、著者の平和を願う心。

『俳壇』

十月号

句集出版よもやま話70

山本鬼之介

【父の句集出版】

筆者は、いわゆる「門前の小僧……」的環境の中で、昭和四十六（一九七二）年から俳句の道に入り、以来五十年余の歳月に亘り俳句を続けてきたが、父・山本嵯迷は、大正時代から俳句を続けていたにもかかわらず、生涯で唯一の句集『ばらの虫』を上梓したのが晩年に近い昭和三十九（一九六四）年であった。昭和十年代から彼の大戦前後の厳しい時代の変遷の中でその機会を逸したのかも知れないが、主たる理由は、生来の「めんどくさがり」の性によるものであったのではと思っている。

【鬼之介の句集出版】

俳句を始めて中堅の立場になった頃から、「そろそろ句集を出したら」という声が周囲から出ていたが、その都度その言葉を受け流してきた。自らの俳句を句集として遺しておきたいという前向きな気持がなくそのままにしていたが、平成二十四（二〇一三）年八月に出版された同人誌「面」一一四号に、山本鬼之介句集として二〇〇句が載り、それ迄に味わったことのない喜びを感じた。

丁度その頃からであったろうか、本格的な句集の刊行について筆者の第一句集の出版元のT氏からの勧誘が始まり、電話や手紙で定期的に句集上梓の決意を促されてきたのだが、

父親譲りの「めんどくさがり」が邪魔をして、はっきりした返事を先延ばししてきた。それを打ち砕く決定打が、筆者が「水明」の五代目主宰になって一年ほど経った令和元年の晩秋の電話での一言「結社の主宰に句集が一冊も無いのは如何なものか」であった。

その心の強烈なパンチに見事にノックダウンされ、句集の刊行を心に決めたものの具体的な作業が思うように進まず、その日から更に一年経ってやっと本腰を入れる始末であった。句集に載せる作品の選別作業を進める過程で、令和三年の一月と四月に外科手術で二回も入院するという思いもよらぬ出来事があったが、それがかえって自身に緊張感をもたらしたようで、二回目の退院後にラストスパートをかけ、出版元の絶大な協力を得て、今年一月、鬼之介第一句集『マネキン』刊行の運びとなった。大安の一月八日に句集をぎっしり詰めた段ボール箱が我が家に届けられ、マネキンを相手に祝杯を挙げた。

【句集を得た喜び】

著者・鬼之介が希望したマネキン人形のあでやかな姿が句集『マネキン』の表紙を飾り、代表句の経緯を証明する三橋敏雄氏の講評が句集の巻末に納まった。序も跋も無い句集であるが、それは自分の意に沿ったものなので全く気にしていない。長いようでもあり短いようでもあった五十年間の俳句作品が凝縮された一冊の句集が、鬼之介の俳句人生にとっての宝物であり、そのことを日々しみじみと実感している。父親譲りの「めんどくさがり」が功を奏した結果であると思っている。

『春嶺』

十月号

句集を読む

片岡幹男

五明 昇句集『旅信』(文學の森)

平成二十九年から令和三年までの三六二句を収録した第三句集である。

思えば人生そのものが大きな旅路で、その旅路の折々の一コマを書き記したのが俳句。俳句は旅先から郷里へ出す「旅信」だ。……と作者は句集名の由来を語る。

裂帛の「押忍」に始まる寒稽古
気張らぬと決めたる余生草の花
ケルン積む男に傾ぐ稚児車
農小屋に風の棲みつく寒の内
短日の一日を使ひ書く弔辞
作者の日常詠は、焦点が明確であり、かつ平明な表現に力がある。季語がビタリと座って内容を一段と鮮やかにする。

何時だつて青春後期柿若葉
マドンナも騎士も老いぬソーダ水
健やかに生ける証の賀状来る
余生いま秋の祭の笛の長
「年を重ねただけで人は老いない」という詩の一節を思い出した。実にアグレッシブな生き方の老後である。句の調べが、おのずと心澄む思いを誘うようだ。

燕来る 筑に小銭の青果店

天工の鑿音荒き雪解沢
禁門の弾痕洗ふ青しぐれ
名水に典座が捌く新豆腐
俳句という詩で荒々しい大景も、清涼の氣にみちた景も詠むことが可能だとあらためて思わせてくれる。

一閃に大河を統ぶる初燕
春昼や発条ゆるぶ鳩時計
独り居の山家を護る鷹の爪
棟梁の淨瑠璃に沸く村芝居
黒南風をはつたと睨む日蓮像
一読忘れ難い印象を与えられる作品には、俳味と禅味が混じっている。季語の斡旋が巧みで揺るぎない。

七五三の児にお辞儀する神の鳩
公園の茂みの中の「もういいよ」
縄電車乗車記念のあのこづち
野遊の莫藎に厨と応接間
「あるある感」いっぱいの子供の情景。季語の情緒が見事に把握された作品は、水際だった手腕である。
本句集の印象は、「水明」主宰・山本鬼之介氏が序文で発言しており、実には的確なので、ここに引用させていたたく。
「たった一言で評すれば「実に上手い」である。もう少し付け加えるなら、「句意が鮮明で容易に共鳴できる」ということである。句意が鮮明であることは、一読二読して読み手が作者の胸中に入り込めるということで、逆に言えば、読者を作者の手中に容易に引き込むことが出来るということでもある。」

作句の心得としても、実に含蓄ある文章である。

『浮野』

十月号

新刊紹介

鈴木貴水

☆句集「旅信」

自選句より(八句)

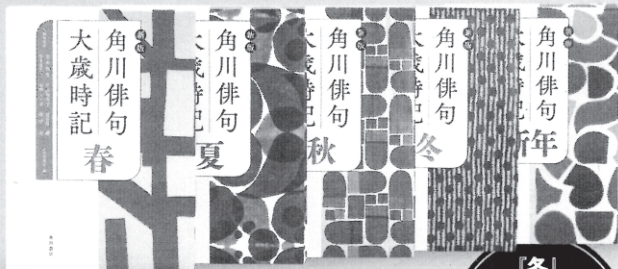
五明 昇

白魚の軍艦巻にある平和
 「百草丸」の古き看板燕来る
 ケルン積む男に傾ぐ稚児チシマ車
 木曾節を葉味に峡の走り蕎麦
 気張らぬと決めたる余生草の花
 飛石は着物の歩幅初しぐれ
 板長が絵皿に咲かず河豚の花
 風花や富士を遠見の一万歩

句集『旅信』には三六二句が収録されている。序文を山本鬼之介主宰より錫る。作者は旅が好きで若い頃から機会を作つて様々な土地を訪れた。国内では全都道府県を、海外では四十ヶ国を訪ね、壮年になってからは社寺巡りを趣味とし四国八十八ヶ所霊場、西国・坂東・秩父観音霊場、三十三観音(各地域九ヶ所)、弘法大師関東八十八ヶ所霊場、関東不動三十六霊場、全国一宮(七十三ヶ国・一〇三社)など満願を達成された。句集は行動力と積み重なった感性が句の基底となっていて、旅の句は勿論多くの秀句が収録されている。

size. 月刊誌『俳句』とほぼ同じ大きさ!
 厚さは約4cm

A5判/上製/函入
 約700~800頁(予定)



俳句歳時記の最高峰、15年ぶりの大改訂!!
 新版
角川俳句大歳時記
 春・夏・秋・冬・新年 各巻定価 5,995円

角川書店編

茨木和生/宇多喜代子/片山由美子
 高野ムツオ/長谷川權/堀切実

編集委員

「冬」
 11月30日
 「新年」
 12月21日
全5巻完結!

特設サイト
 はこちら!



見出し・傍題合わせて
 1万8000季語以上。
 例句は旧版から大幅に刷新。
 5万句超を収録。

「春」「夏」「秋」好評発売中!



KADOKAWA

KADOKAWA公式サイト <https://www.kadokawa.co.jp/>

発行 株式会社KADOKAWA 〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3 『大歳時記』編集室 050-1744-2828

第6回 水明塾 を終えて

青木鶴城

穏やかな晴天の十一月三日（祝）に第六回水明塾が浦和コミュニティーセンターにて開催されました。

今年は、第一部は現代俳句協会幹事長の後藤章氏を講師に迎えての講演会、第二部は網野月を講師による全句講評講座を実施しました。

後藤章氏は、平成三〇年に現代俳句評論賞を受賞されている論客で、どれだけの硬い話かと思いきやユーモアを交えてのなかなか興味深い話を展開して頂きました。主な講演内容は左記の通り。

- 一．虚子の『歳時記』の意味するもの
 - 二．季重なりの意味するもの
 - 三．季語の解説の改変
 - 四．矛盾構造の意味するもの
 - 五．脳の癖と写生派、前衛派の違いと鑑賞について
 - 六．零余子とかな女について
- 氏の講演では、虚子が季重なりを重大な問題ではないとし

ていたこと、新歳時記における季重なりの句が初版では何と、二十%にも及んでいたこと、季語が普遍的なものではなく時代や社会情勢によって本意が変化すること、一句仕立ての句において二物衝撃の代替としての矛盾構造の句のこと、脳の働きは、目で見えた情報の三%だけが実像として認識され、残りの情報は、以前の知識や情報がフラッシュバックして映像を結んでいる等々興味満載で、全く飽きさせないものでありました。

特に興味深かったのが、六、の零余子とかな女について、零余子が虚子の絶対的な信頼を得ていたのに、袂を分かつこととなった経緯や、かな女の素晴らしい作品の評価はもとより、加賀千代女の研究においては目を見張るものが有るのに俳句界における評価が低すぎる。今後は水明の皆さんが評価を上げるべく、努力が必要である。と締めくくられたことでありました。

第二部においては、参加者からの全四十二句の投句に対して、網野月を講師より、二時間に亘る全句講評を頂きました。質疑応答では「に」と「の」の助詞の使い方、カタカナ表記に関する議論が白熱し、予定の時間をオーバーするほどの有意義な塾となりました。

全句講評講座の詳細については、網野月を講師の報告資料を参照ください。

水明塾・全句講評講座

網野月を

去年に引き続き全句講評講座を開くことが出来ました。二十一名の参加者、四十二句の応募があり、良句ばかりが揃いました。従って、課題としては、助詞の活用方法の展開、同格並立の表現の是非の吟味など、各句の高度な吟味が講評の内容になったのです。

秋の水「整ひました」と呟きぬ

冬帝に出遭ふ皇帝ダリアかな

「呟きの整ひました」秋の水」という方法もあるでしょう。原句のままですと中七座五が散文的な流れになります。「」を使用しているので当然ともいえますが、だからこそ散文的になることは避けるべきだとも言えるでしょう。一方「……ぬ」は良い選択です。完了もしくは完了を確定する助動詞の「ぬ」ですが、本来この「ぬ」は主体の意思が働かないものなので、だからこそ「（思わず）呟く」の動詞に適合しています。

次句はチャレンジしています。上五の季語「冬帝」に「皇帝ダリア」が遭遇した、という意味です。「皇帝ダリア」は近い将来季語として取り上げられるかも知れませんがね。

仏壇の父と一献今年酒

名画座に偲ぶ純愛敬老日

鬼籍に入られたお父様と酌み交わしているのでしょうか。多分、お父様もお酒が大好きだったのでしょう。でも実は、作者ご自身がお好きなのです。「仏壇の」以外にも「掲額の」「遺影の」「鴨居の」などが考えられると思います。

「次句の「偲ぶ」は「慕ぶ（しのぶ）」もあります。「したう」の読みの方が強いので、原句の「偲ぶ」の方が的確でしょう。一方、座五の季語「敬老日」との取り合わせは面白いですが、句意の確定は百パーセントにはならないかも知れません。読者に任されている部分が多いのです。一方で、上五中七から「敬老日」を割り出す場合、季語が動きますが、座五の季語「敬老日」を言うための上五中七と考えると納得がいきます。

微動だにせぬ釣人よ背に蜻蛉
満月を待ちわび寝たり窓の端

「背に蜻蛉」がとまっている、という句意です。「背の蜻蛉」とすると「釣人」と「蜻蛉」が同格になりますが、相対的な関係性から作者が「蜻蛉」を発見した意味が強くなります。「に」の助詞は説明的になるといって評者がいます。が原句の場合は「に」が適切でしょう。「の」は動かないから止まっているという理屈にもなっています。

次句の「たり」は継起を表す助詞です。「待ちたり寝たり」も可能ですが、古臭くなりますね。このままですと作者が「窓の端」に居ることもなります。このままですと作者が「窓の端」に居ることにもなります。「窓の端」に月の出が見えるのか。「満月を待つてゴロ寝や窓の端」くらいでしょうか。良い添削ではありませんが。

天高しにれかむ牛の涎垂る

小鳥来る夫婦の会話弾みをり

「にれかむ」は反芻することです。安全なところでゆつく

りと反芻する牛の姿は、「天高し」にぴったりです。一方、「にれかむ」と「牛の涎」は重複感があるかも知れません。他の顔の部位にした方が良いでしょう。「耳」か「鼻」です。ね例えば、「天高しにれかむ牛の耳の標」。

次句は、上五の季語と中七座五の句意のバランスが素晴らしいです。座五の「……をり」の終止形は良い選択です。他に「弾みぬて」くらいで、終止形にしないことも出来ます。上五の季語が「小鳥来る」と終止形に収まっているからです。

熟れ柿の落ちたる庭に軍鶏遊ぶ 逆らいてちまちま元気秋の蝶

前句は一句仕立てです。意味がすんなり呑み込めます。中七の「……庭に」で空間の呈示が来ています。ただ、「……や」切れには出来ないでしょうか。「……に」によって理解しやすいということは、散文になっていくということでもあります。散文の目的は理解しやすさにあるからです。「熟れ柿の落ちたる庭や軍鶏遊ぶ」。

次句は「ちまちまと」の用法を「ちまちま」だけにして使っています。新しいと思います。句意の解釈においては何に逆らっているのか？は読者に任されています。景の中では例えば「風」でしょうか。観念的な世界では「世間」でしょうか。その両方共かも知れません。観念的な意味合いが付加されると、必然的に座五の「秋の蝶」は擬人化されて鑑賞されるでしょう。「元気」「生きる」は（生きていく）動物の季語に対して重複感があります。「ちまちまと風に逆らふ秋の蝶」。

漆紅葉真つ赤に燃ゆる赤城山 鐘の音秋野にひびき霽深し

この作者は「赤」が大好きです。若さを感じます。ただ「紅葉」「真つ赤」「燃ゆる」は重複しています。「漆紅葉夕やみ迫る赤城山」。次句は、大変苦労して作句されています。霽は季語にはなりませんから。本当は霧にしたいところでしょう。この場合「霧」と「秋野」と比べてみてください。「秋野」と最初に把握したのです。最初に思いついた季語は、別表現になる可能性が高いのです。兼題で作つてばかりいるとこの弊害が出ます。「霧深し広野にひびく鐘の音」。

五線譜を風が踊りて秋音色 ポツポツと咲きし山茶花暮れなづむ

前句の雰囲気は出来上がっています。「五線譜」「音色」に関連性がありますし、「五線譜」と「風が踊る」も近親性があります。本物の目の前にある「五線譜」ではなくて音楽を暗示するものであるならば、景が結びづらくなる可能性があります。「五線譜に風の踊りて秋音色」「五線譜に葉風の音や秋の色」。

「ポツポツと咲く山茶花や暮れなづむ」はどうでしょうか。または「山茶花のポツポツと開き暮れなづむ」。文法的には動詞が続きますので「開き」にしました。

オノマトペならば、小さい「つ」の表現が旧仮名遣いでも可能であろうと思います。原句の場合、「ポツポツ」と仮名遣いすると別の発音になりかねませんね。「ポツポツ」と仮名遣いの「ウオツカ」の発音は本来「ウオツカ」ですが、「ウオツカ」と旧仮名遣いでは表記されていますから「ウオツカ」と発音する人が多いようです。

鮭を買ふ故郷の川のかつぷつと 赤のまんま砂場に置かれ「またあした」

「買ふ」人物と「ふつふつと（思い出す）」人物が一致していて読者には鑑賞しやすくなっています。が、上五と中七座五のバランスが気になります。「鮭買へり（新巻や）故郷の川ふつふつと」。

次句の「砂場」が良いですねえ。ままごと遊びの空間としては持つて来いですが、懐かしささえ感じます。五七五のリズムにならないでしょうか。「赤まんま砂場に置かれ「またあした」「またね」「あしたね」園の砂場の赤まんま」。

リフト揺れ花野掠めて山頂へ
陸橋の向こう我が町天高し

「……揺れ」（自動詞）の連用形で切れを作り出しています。ただし、句意からすると「リフト」が主体ですから、連用形で切れを強くないで、「揺る」と文語の終止形で当たり前に切った方が、中七座五の主体としての「リフト」との繋がりが担保されて、「リフト」が活きると思います。「リフト揺る花野掠めて山頂へ」。

次句は、秀句です。筆者の好きな句です。景の大雑把な感じは否めませんが、座五の季語が「天高し」ですから、このくらい鷹揚でも良いかと思えます。「陸橋の向こう」「我が町」「天」すべて空間を表現していますから工夫する余地があると思えます。「陸橋の向かう我が町秋高し」。

渡り鳥夕陽の漏る野天の湯
青酢橘味はひ尽くす焼き魚

リズムも良いし、叙景の王道ですね。「鳥渡る」としななかったところも良いと思います。「夕陽」は「夕日」が良いでしょうね。沈む「日」ですから、落陽という表現がありますが、次句の「味はふ」が他動詞ですから、上五の後に「を」が

省略されていることになりましたね。一句仕立てです。句の焦点が「焼き魚」へ行ってしまうように季語「青酢橘」と「焼き魚」のバランスをどう考えるかが課題です。

地下鉄が地上に顔を秋日和
水澄むや語り継がる偉人伝

丸の内線や東西線は地下鉄ですが地上に出ますね。例えば、お茶の水のトンネルを抜けた辺りです。「秋日和」に驚きつつも、嬉しくなった景でしょうか。中七の「……を」の後の省略が効いています。省略されている分リズム的に一呼吸あって、座五の季語「秋日和」の重みが演出されています。上五の「……が」の主格の呈示は「……の」に置き換えられるでしょうか。この「の」は俳句（韻文）の得意な用法です。次句は、大胆に上五の季語と中七座五の句意を離しています。離れた場合、何処かに微かに繋がっているヒントを潜ませることが必要でしょう。読者への思いやりのためのヒントです。

金輪際開かぬ日記文化の日
長き夜や漸う開く水明誌

ご自身の「日記」ではないように思いました。形見としての「日記」でしょうか。「金輪際」は少々強い表現かも知れません。もともと仏教用語です。座五の季語「文化の日」がどこまで働いているか？でしょうか。作者の思っている句意とは解釈が異なるかも知れませんが。

次句の「長き夜」のイメージ句だと思えます。よく意味も伝わっています。実は「長き夜」は少々ぼやけた季語ですが、よく使いこなしています。

山小屋に主の句集鬼胡桃

縄文の心を拾ふ胡桃かな

良句です。座五の季語「鬼胡桃」が効いていると思います。日本に自生するのは「鬼胡桃」一種だけだそうですね。「姫胡桃」は「鬼胡桃」の亜種です。

次句の「縄文の心」は狩猟採集の時代の人間と解釈しました。「縄文の心を拾ひ沢胡桃」として中七の後に軽い切れを作っても良いと思います。

朝寒や水道の音尖りをり

啄木鳥のつつつと登る古木かな

「朝寒」の中で、「水道の音」が少々堅く感じたと解釈しました。「水道」は具体的なものも示していると思いますが、より具象に近づけた方が景がはつきりしてくると思います。「朝寒や蛇口の水の尖る音」。

次句の「つつつと」はめったに見ないオノマトペです。良くこの表現に辿り着きました。「登る」は木肌を一步一步登るイメージでしょうか。「つつつと」は飛び跳ね上がっている景ですから「上がる」でも可能かと思えます。詠み手の感性と趣向に任される部分です。

ゆつくりと包む夕日や大花野

秋風の震はせてゐる糸電話

実は「大花野」は大きらいです。が、この句の「大花野」は好ましいです。成功しているからです。少々、大きすぎるくらいは景でしょう。「包む」は他動詞ですから、どちらが主語かは明確にした方が良いと思えます。「ゆつくりと夕日の包む大花野」。

次句は、このママでしょう。「糸電話色無き風の震はせて」という方法もあります。

秋来るや橙色のアロマかな

全体的なイメージは出来上がっています。嗅覚を視覚で表現したことはお手柄だと思えます。一方で景に曖昧さを感じます。「秋来る」は立秋のことです。具体的な果物の季語にしても良いかと思えます。そうすると「橙色」に工夫が必要かも知れませんが。例えば「かぼす切る橙色のアロマかな」などです。

次句の「総やかに」は新味があります。花を具体的にしても良いでしょう。その場合は「秋の香」ではなくて、「香の風や」「風に香や」くらいにして、花の季語に置き換えます。逆接の「……とて」が関係性を説明しています。「風に香や小さき紫苑の総やかに」「秋の香や小さき花の総やかに」。

心とは強きものなり破芭蕉

赤い羽根貰ひて心軽くなる
座五の季語「破芭蕉」と句意を能く取り合わせました。この断定も若さでしょう。筆者では「心とは強きことあり破芭蕉」と逃げてしまうところです。

次句の季語「赤い羽根」は買うものではありません。募金へのお礼としての羽根です。そこに気付いて「貰ひて」になっているところが気付きです。謙虚な心持ちの表現でもあります。「……て」の接続助詞を使用するならば、句跨りでもありません。作った方がリズムが良くなるでしょう。羽根が生えたような感覚になれると思えます。「赤い羽根貰ひ心の軽くなる」。

不動尊の銅葺き屋根や秋気澄む

お喋りの途切るればふと昼の虫
俳句の典型的な型になっています。中七の「……や」切れ

と座五の終止形ですね。中七の体言止め+座五に主になる切れという方法もあります。「不動尊の銅葺の屋根秋澄めり」。

次句には、中七「途切るれば」に苦心の跡が伺われます。この文語なかなか言えませんが、「途切れてみれば」「途切れれば」などもあります。仮定もしくは原因の用法です。

座五の「昼の虫」の「昼」はどれ程の効果があるでしょうか。「季語」は、どちらでも良い場合、意味を絞ってしまうとかえって読者は意味を汲み取らないことがあります。その季語（この場合は「昼の虫」）にしなければならぬ特段の理由が無ければ大きな季語にしておく方法があります。それで十分です。「お喋りの途切るればふとちちる虫」。

唐黍の粒や思ひ出ほるぼると
秋澄むや「夕焼け小焼け」四時が鳴る

良句だと思います。座五の「ほるぼる」が「粒」と適合します。ただもう少し読者にはヒントが欲しいです。幾つもの解釈が成り立つからです。読者に任せてしまっている部分が多いということです。例えば、「唐黍の粒」は乾燥したそれなのか、茹でたそれなのか、などの鑑賞のずれを生んでいるということです。この句の景の具象は「唐黍の粒」だけですから、「焼（茹で）唐黍食めば思ひ出ほるぼると」。

次句、「夕焼け小焼け」＝「四時」です。同格です。説明とまでは言わないですが、理屈が透けて見える感じですね。加えて少々三段切れに読めるかも知れません。「四時が鳴る」は「四時を告ぐ」でしょうか。そうすると、「夕焼け小焼け」が主語になります。「秋澄めり「夕焼け小焼け」四時を告ぐ」。

曲屋の馬屋の跡や秋の声
老舗ほど国旗掲ぐる文化の日

座五の季語「秋の声」から、曲屋を引き出しています。曲屋のアイテムがものを言っています。「馬屋」は「厩」でもいいかも知れません。「跡」として残っているのではなくて、今ここには馬が居ない（飼われていない）ということの方が良いでしょう。「曲屋の厩のなごり秋のこゑ（音）」。

次句は今日の句です。「ほど」（名詞）の機能の一つは程度・基準を表します。この場合は助詞化した副詞として使用されています。なかなか難しい用法です。「老舗ほど日の丸掲ぐ文化の日」（文語の使い勝手）ですが、「ほど」の入れ替えがあっても良いでしょう。「ほど」があることで一般論になっているのです。「茶の老舗国旗掲ぐる文化の日」。

着ぬままに抽斗の生きてをり
鴉の贄子は強かに生きてをり

着物なのか洋服なのか、ともかく着るものでしょう。座五に「暮の秋」とあるので夏物か、袷くらいまでを想像しました。「まま」の関連性から、入れたままなのか、戻したのかの解釈は読者に任されています。ただ、もう少しヒントが欲しいですね。ミニマリストもしくは断捨離などが頭に浮かびますが、「抽斗の中にあるまま」の句意の方が「暮の秋」に合うように思います。只、この句に関してはママでしょう。

次句の「鴉」の肉食鳥としての性格を「強かに」で受け取っている構図です。「子」の力強さを褒めている、句意です。「贄」はもともと朝廷や神社への供え物で、「鴉の贄」の見映えから「鴉」のみの呈示でも十分なように思います。例えば「虎鴉（とらもず）」＝「児鴉（ちごもず）」などでも良いでしょう。「虎鴉や子は強かに生きてをり」。

水明例会

第一例会（浦和）

境延昭
茂木和子

花芙蓉お市の方の化身とも
草紅葉切株に置く旅鞆
引く波のかそけき響き草紅葉
亡き妹の化身のやうな萩を刈る
敷石の形それぞれ草紅葉
草紅葉ブツセの空のなほ遠く
穴に入る蛇つややかに化粧して
木柵に錆びし針金草もみぢ
倒れ込む若き血潮や草紅葉
肌守る厚き化粧や秋天下
草紅葉静止画のやう牧の牛
野面積みに入り込んでゐる草紅葉
草枕重ぬる里や草紅葉
道化師の化粧の巧み秋さびし

順子 喜恵 マスミ 理恵 はるみ 節代 和子 以上特選 延昭 理恵 チアキ 和葉 順子 マスミ はるみ

第二例会（東京本所）

青木鶴城報

草紅葉陽落つる方へ溶けゆけり
泣き笑ひの道化師ふいに菊配る
長き夜の眠りを乱す化学式
村芝居向かひの餓鬼が七変化
草紅葉錆びたるままの蛇口かな
失せしもの見付けたやうな草紅葉
賑賑し小鳥震災慰霊堂
身籠りし孫のうなじや秋日和
海展き潮入の池秋日和
秋日和塩田大浪砂模様
老爺座し日を収獲す秋日和
蹲に波紋広がる小鳥かな
病廊に木洩れ日揺るる秋日和
秋日和敵交はりし千枚田

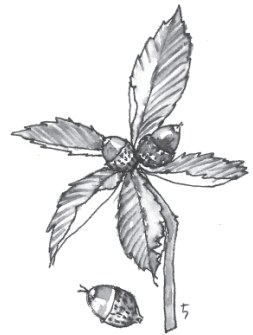
由紀子 節代 亮一 徹平 喜恵 和子 みどり 玲子 則子 以上特選 鶴城 道子 則子

第三例会（東京）

五明徹昇報
曲淵徹雄

漫ろ行く哲学の道秋日和
塔の辺りの人多くて秋日和
声揃へ綱引く子等や鰯雲
駅の名に目白巢鴨や小鳥来る
万物を包み込むよな秋日和
隅田川水面に映る秋日和
天空を大カンヴァスに秋の雲
路線バス小さき旅する秋日和
晒し干す布団の戦ぎ秋日和
爺様のおとぎ話や秋日和
零余子ひとつつまむ指先まで酔うて
雁渡しかつて土蔵は泣く処
秋の蛇ひつそりと干す男物
入相の女将の孤影秋の蛇
女形のふりのいやいや芋の露

淑江 玲子 サカエ 竺仙 弘子 峰江 敏江 みどり 鶴城 萬蝶 〃 〃 〃 徹雄



秋の蛇舌美しく隠れけり
浜町の蟲屑に集ふ秋裕

大場順子
昇

——以上特選

穴惑ひ金砂流るる砂時計
目を合はせのつたり去ぬる穴惑ひ

理恵

太棹の津軽三味線蛇穴に
穴惑ひ逢瀬に未練残しけり

喜久

蛇穴に入る山の子の秘密基地
穴まどひの息遣ひかと葉擦れの音

雅夫

火の山にマグマの温み蛇穴に

康世

境
石井喜恵

大場順子
昇

第四例会 (浦和)

延昭報

どぶろくや甘酸つばさは父の味
ぬのこづち雑木林の秘密基地

寛治

山寺に貰ふ朱印とぬのこづち
酔へば又昭和の話濁り酒

延昭

寄合にどぶろく提げて来る奴も
柚小屋の隅に出を待つ濁り酒

昇

禍も福も呑み込む度量にこり酒
ぬのこづち取つて付けたる誉め言葉

順子

——以上特選

喜恵

陶工の悠悠自適ぬのこづち
ぬのこづち日向の匂ひ持ち帰る

光太

口笛を吹いて彷徨牛膝
笈摺の裾に三つ四つぬのこづち

恵子

——以上特選

翔太

——以上特選

光太

——以上特選

恵子

——以上特選

マスマ

ホームランボール探して牛膝
出稼ぎの寡黙な父や濁り酒

由紀子
曆文

クラス会元校長と濁酒
どぶろくや父の十八番の数へ唄

美佐尾

生涯を媚びず傲らずにこり酒
芳醇な香りに酔ふや濁り酒

でん治

古井戸は城の抜け道ぬのこづち
寄合の御開き里の濁り酒

昇

——以上特選

延昭

——以上特選

玲子

——以上特選

順子

——以上特選

喜恵

第五例会 (浦和)

梅澤佐江報
河野はるみ

晩秋の入り日追ひゆく鳥の群
晩秋の嵯峨野路わたる鐘の音

玲子

晩秋の大河を下る小舟かな
晩秋や湖面に落す山の影

義子

千切れゆく雲惜しみつつ晩秋
運動会園児みんなに金メダル

宣子

暮れなづむ街晩秋のひとつ星
——以上特選

理恵

——以上特選

佐江

——以上特選

美佐尾

「ラストスパート」声が飛び交ふ運動会
運動会空の青さを満喫す

はるみ

晩秋の茜に染まる白川郷
晩秋の沿海をゆく予讃線

玲子

秩父嶺の色失せてゆく晩秋

宣子

——以上特選

義子

——以上特選

水尾

晩秋の駅早々に灯がともる
朝まだき号砲鳴りて運動会

理恵
佐江

若松句会 (京橋)

正木萬蝶
石田慶子報

秋晴や「春夏冬中」と云ふ看板
売下や秋日集むる虫めがね

月を

秋晴の銀座マロニエ通りかな
売店に「にっこり」といふ梨笑ふ

京子

秋晴や松籟にある自由律
カリヨンの音色澄みたる秋の晴

千春

満席の園児カートや秋の晴
売られゆく臓器の行方雁渡し

マスマ

——以上特選

萬蝶

——以上特選

鶴城

——以上特選

佐江

——以上特選

はるみ

——以上特選

理恵

——以上特選

俊晴

——以上特選

鶴城

——以上特選

佐江

——以上特選

京子

——以上特選

紀子

——以上特選

千春

——以上特選

マスマ

——以上特選

慶子

——以上特選

萬蝶

草紅葉川にのぞめる磨崖仏
 晩秋のホルン流るる山の牧
 地虫鳴く五重の塔の心柱
 草もみぢ休耕田の華やげり
 畦の美し踏むも不憫や草紅葉
 卒寿まで歩くと決めぬ草紅葉
 梵鐘の余韻おんおん鹿立てり
 草紅葉この道行けば狼煙跡

紅葉して木々は別れの宴かな
 秋深むたまにはロマンズ小説も
 吹きすさぶ大河の岸辺草の色
 寝上戸の面影を追ふ新走り
 木槿掃く馬上の翁しのびつつ
 うすうすと雲と見紛ふ昼の月
 道祖神と交はす笑まひや草紅葉
 廃線の枕木燃ゆる草紅葉
 時化の中かちと綱巻く船着場
 狛犬に大きなマスク秋祭
 廃屋の生き生きとして草紅葉
 柿たわわしつかり耐へて古木なり

玲子
 ッ
 ゆら女
 洋子
 千津子
 さわゑ
 和子
 道子
 以上特選
 ゆら女
 洋子
 智恵子
 早苗
 玲子
 千津子
 道子
 和子
 千世子
 千枝子
 満耶子
 さわゑ

☆ ☆

昔話あれこれ 22

雄略天皇の治世

雄略天皇の皇統

大長谷王は長谷朝倉宮(奈良県桜井市)に入り天下を治めた。

第二十一代雄略天皇である。(埼玉県

行田市稲荷山古墳出土鉄剣銘に

「獲加多支爾大王」とあるのに擬せられる。)

天皇の後は 大日下王の妹若日下部王と都夫良意富美の娘韓比売の二人である。

若日下部王との間には子が無い。

韓比売との間の子は、

白髮命(後の清寧天皇)と妹若帯比売命である。(清寧天皇には子が無く、允恭天皇系の天皇はこの天皇で断絶する)

雄略天皇の国見

雄略天皇は若日下部王を妻問うために

河内に行幸した。途中山の上から国見をすると、屋根に鰻木を載せている家があった。鰻木は神社や宮殿にしか造られないものである。

天皇が調べさせると、志幾の大泉主の家であった。

「あいつめ、自分の家を天皇の宮殿に似せて造るとは。」と言って、その家を

焼かせようとした。

大泉主は恐れ畏み頭を地に付けて許しを請うて言った。

「私は卑しい者でございますから、何も存ぜず誤って造ってしまいました。恐れ多いことでございます。それゆえ、お許しただくために献上物を奉りましよう。」と言って、白い犬に布をかけ鈴を

付けて親族の者に犬の縄を取らせて献上した。

そこでその家に火を付けるのをやめた。そしてその白い犬を若日下部王への贈り物とした。

(つづく 丸山マスマシ)

各地句会



コクーンシティカルチャー俳句教室(さいたま新都心)

実柘榴や光年へだつビッグバン
出離子のこち良き音や秋裕
鮭帰るもんどり打つてジャンプして
狛犬の眼が曇る朝の露
母が子に摘まむ手解き石榴の実
月の友バックに二本串団子
草叢の防災井戸に露しとど
石榴裂け友が弱音をぼろり吐く
糞虫やどなたに掛ける糸電話

延昭 美枝子 健司 早都子 淑子 まき子 俊晴 俱子 昇

めだか句会 (浦和)

秋深し浮橋揺るるダム湖かな
冬近し「蛍の光」急かす店
留守電の声繰り返す秋深し
秋深し音量上げてキムチ食ふ
準急ののんびり旅や花野原

謙一 和幸 知子 十三子 敦子

円卓の会 (浦和)

芋煮会憶ひ起こせば半世紀
影ながく陽のやはらぎて秋深し
刺草の上竿渡し芋茎干す
ころころと流し一周衣被
思ひ出を曳きてさざ波秋深し
散歩道零余子のサブリでもう一度

芳朗 八千代 月を 鶴城 美智

鉦叩湯気真つ直ぐにミルクテイ
サツバ漕ぐ娘船頭秋時雨
斑なる桜紅葉の点描画
銀輪のベル森林へ霧うごく
ポン菓子の匂ひ広がる秋祭
蛇の目傘すぼめ合ふ路地秋時雨
新蕎麦や粉は極上品なのに
海鳴りに身を包まるる夜なべかな

輝翠 道翠 修 静香 翔太 月を 鶴城

神戸大池句会 (神戸)

出漁の船笛ひびく秋の空
うすうすと雲と見紛ふ昼の月
ご褒美の松茸づくし城の町

玲子 千津子 早苗

たかな俳句会 (川口)

夕暮れの大樹をおそふ椋の群
また少し千切れて我も鯛雲
椋鳥のどれがボスやら執事やら

久美子 のり子 ふくみ

若鮎句会 (浦和)

千代紙の手製箸置き冬近し
椋さわぐ罫大樹に夕日落つ
幾何よりも代数が好き冬近し
停泊の巨船伸びゆく鯛雲
椋の群町の喧騒消すごとし

小麦 義子 鶴城 静香

和歌山水明句会 (和歌山)

遠山の頂白し鴉の声
長き夜を夢幻にひたり茜さす
長き夜や三年日記読み返す
祖父の打つ駒の甘さの夜長かな
存在を誇示する百舌鳥に見下ろされ
布団打つ音がこたます鴉日和
夜長かな切れ味甘きボンナイフ
離宮へと誘ふ並木鴉の晴
鴉日和古郷の山に妣を抱き

和子 道子 千枝子 千世子 満耶子 きわゑ 洋子 廼代

花衣の会 (浦和)

「つや姫」てふ里の艶めく今年米
秋の日はバンジージャンプ真つ逆さま
行く秋や音なき雨の石舞台
餌付けせん新米まくも鳥は来ぬ
つやつやの赤児の肌や今年米

みよ
みち
峯雄
治
章嘉

水明松本句会 (松本)

尾根伝ひ日毎に変わり山装ふ
一等はばくがいただき運動会
庭石の陰からすくつと曼珠沙華
遠くから子等の声するコスモス野

陽子
マリヌ
玲子
寿子

野ばらの会 (浦和)

共白髪温め酒の酔早し
軽やかな鳥の助走や秋の庭
「二刀流」は期待以上や温め酒
「百葉」と宣ふ夫の温め酒
秋園や二人を包む夕間暮れ

栄子
茂子
夏江
秀子
みき子

ミモザの会 (横浜)

つり革に捕まり窓の鱗雲
しやくしやくと梨食む子らの白き歯よ
零余子飯かつこむ指のこつこつと
零余子得てレシビに迷ふ楽しさよ

亜弥子
栄子
由美子
詠子

道の駆ざるに零余子の天こ盛り
歌枕の一夜ゆかしき零余子飯
東海道の旅人なりてとろろ汁
零余子飯食ふ零余子先生どんな方?
地産地消名入りの零余子買ひにけり

水明澤つくし句会 (大阪)

河風や家路を飾る虫の声
青林橋時に酔つばき娘の言葉
虫食ひのみぢ葉も良し加賀友禪
大あくび夜食片手に当直医
釣瓶など知らぬ世代に秋夕日
灯りゆく窓を重ねて十三夜

智恵子
人美
さりり
美令
洋子
ゆら女

水明鬼石句会 (鬼石)

アサギマダラ舞ひ降り庭の藤袴
稲雀誰を待つのか首かしげ
そぞろ寒デジタル技術追ひつけず
耳遠き夫との会話秋夜長
誰か来る気配のありて胡桃落つ

和子
ナヲ子
洋子
聡子
紀子

櫛の会 (浦和)

差し替へし花の屑散り菊人形
佗び寂びの社に飾る菊人形
新米を祖霊に供へ先づ感謝
遠き子に新米送る宅配便

朋子
裕誌
彰二
克之

新米や買ひ替ふ釜の蓋をどる
あてやかな歴史絵巻の菊人形
新米や日本に生きる幸せよ
魂入れて主役仕上ぐる菊師かな
若武者の菊人形の走りさう
口の中はねる新米新湯で
菊人形かざす扇に夕陽射す
新米や儀式のやうに箸を取る

鶴川山百合句会 (町田)

鶏頭は庶民の花よ福相寺
駄菓子屋のガラスの引戸秋簾
子規庵の鶏頭の種貰ひ来し
鶏頭の種をこぼして多産かな
秋簾内より届く噎れ声
秋簾露天風呂よりはしやぎ声
鶏頭の紅干されても紅通す
鶏頭の群れ紅すぎる怖すぎる
越しし家おいてけぼりの秋簾
晴天の供華のまなかに鶏頭花

雄二郎
月を
喜久
史代
広子
由美子
千春
理恵
美千子
玲子

山茶花 (浦和)

上州訛飛び交ふ茶屋の乳茸そは
切り株に杉茸真白泡々と
そぞろ寒「トラトラトラ」に感激す
びくびくとけもの道のきのこがり
教会の木椅子の軋み漫る寒む

マスマ
光子
清一
美江子
綾子

繭の会 (浦和)

三界に家なき女山椒の実
そつと刈るわが子の髪や新松子
湧水の砂の踊りよ水澄めり
水澄みて変はり豆腐の面構へ
酒蔵の小窓の明り水澄めり
水澄むや柄杓作法の四畳半
教科書は持つて帰らず新松子
船頭の菅笠映し水澄めり
水澄めり屋根に苔むす調神社
水澄むや水面に遊ぶ雲の影
新松子わらひ分け合ふ落語会
臨界の脳みそ溶ける笑茸
新松子茶屋の賑はふ浜離宮
ランニングの列の殿新松子

珪子 夕峰 粉雪 風舎 まりこ さよ子 正信 隆夫 トエ 比早子 悦子 月を 鶴城 小京子

新聞は包むものなり泥の芋
行く秋や引出しに文入れたまま
行く秋やひとりバス待つ村外れ
あゆみの会 (浦和)
場外の打球の先の草紅葉
草紅葉しらさぎ一羽餌さがす
地下足袋の歩荷遅し紅葉山
擦れ違ふリフトは無人草紅葉
花道を六法の足秋深し
飼猫が誘ふ散歩草紅葉
皐月の会 (浦和)
逆さ富士散りし紅葉に色どられ
熟れ柿の鮮紅映る切子皿
朝寒や杜氏の太き指白し
秋立つやえいと蹴り上げ逆上がり
人見えず柿がたわわに過疎の里
鳥や子に囲まれてある柿日和
白菊は国葬ありて首を振る
稲の穂や西日にいよよ黄金色
物言ひも軍配どほり秋の声

月を 鶴城 宣子 重子 山遊 俱子 啓子 藻好 光代 美佐尾 珪子 順子 紀子 静香 孝麿 曆文 さいち

地の力借りて実生や壇の実
馬肥ゆるパン工房の鐘の音
地底湖は青く輝き秋の水
さちさちの突進助けゆく野風
廃屋の地まで覆ふや葛
高圧線の翳なす野面蟬蛸とぶ
方丈の庭の木漏れ日飛蝗飛ぶ
きざきサークル (浦和)
朝寒や降神願ふ禰宜の声
鹿垣の縄締め直す里の人
延々と続く猪垣島の尾根
鹿垣や空砲響く峡の里
猪垣や監視カメラに人の影
朝寒や至福のコヒーほろ苦し
朝寒に駒場とびこえ子等の歌
愛犬の洋服選び朝寒し
鹿垣の崩れしままに獣道
野菊の会 (与野)
秋夕焼麒麟はいつも遠目差
秋天のキリン八方目配りす
空高しキリンの赤ん坊ギブスして
キリンは首を天に預けて天高し
晩秋の空かき廻す麒麟かな
手招きに近づく麒麟秋うらら

富子 正子 玲子 千アキ 諒明 ひろこ 道を 昇 喜代子 和 啓子 俱子 和枝 かつ子 和子 美代子 和子 清子 清子 知子 光子

離の会 (浦和)

星流る岩間に光る忘れ潮
星流れまた新しき星生まる
薄らと色付き初めし里の秋
ごども食堂たれが置きしか笑み石榴
ざんなんの爆ぜて古代のひすい色

喜恵
燈女
チアキ
輝翠
佐江

秋巡葉子等を軽々举ぐ力士
秋色に老いの一徹軽業師
柄に手をかけて見得切る菊人形
家路への足取軽き良夜かな
眼が合ひし菊人形は着替へ中
無花果や訛飛び交ふクラス会

利子
卓郎
治子
紀子
寛治
順子

みちのくの杜氏理想の今年酒
朝焼けの遠き連山刈田風
眠りに入るや刈田に雨の降る夕べ
秋深し空想癖の恋女
黄昏るる刈田に響む寺の鐘
秋うららたどたどしくも懸想文

卓郎
美子
幸代
桂子
久美子
かつ子

青葉の会 (浦和)

秋夕べ門灯点滅する我家
点点と空渡り行く冬の鳥
棟上げの木の香漂ふ秋時雨
秋の野の木道行けば風甘し
秋の海点となるまで送る船
うるし紅葉の点々と映え山の肌
秋時雨そぼ三昧の店でれば
秋郊や古利根川の夕間暮れ
秋の夜や元素記号を叩き込む
りんどっ俳句会 (浦和)

美紗子
真理
美智枝
美子
啓子
公子
洋子
和子
輝翠

長長と説法ききて薯蕷汁
母娘して鉢をどらせてとろろ播る
人生の主役は自分小鳥来る
みのこづち香煙上る野良の暮
みのこづち急ぐ下山の土産物
世渡りのうまさ妹あのこづち
麦とろろ何も語らづ父破顔

秀子
燈女
栄子
徹平
正行
卓郎
茂子

野分後袋叩きと言ふ仕打ち
爽やかや喉の渴きにレモネード
時一つ進みて野分通り過ぐ
野分中縦列乱る下校の子
野分晴石を蹴り蹴り行く子ども
野分きて名水の池さんざめく
離婚して波音さやか里の海

和風
郁子
保人
ことは
初花
寛久

一片の詩想を描く秋の虹

深秋や受話器の奥の夜想曲
榛の木のつづく越後の刈田道
全身で手を振る別れ刈田道
夫逝きて想ふ日々あり醉芙蓉
ベタル踏む直つすぐにゆく刈田道
合掌の家々つなぐ刈田道
美術展時計溶け出す幻想画
銀輪を抜けて先行く刈田風

弘夫
サヨ子
翔太
君夫
正信
徹雄

一片の詩想を描く秋の虹
深秋や受話器の奥の夜想曲
榛の木のつづく越後の刈田道
全身で手を振る別れ刈田道
夫逝きて想ふ日々あり醉芙蓉
ベタル踏む直つすぐにゆく刈田道
合掌の家々つなぐ刈田道
美術展時計溶け出す幻想画
銀輪を抜けて先行く刈田風

倭子
佐江
延昭
ます美
水尾
義子
翔太
徹平
忠男

山並の藍やはらひで秋思かな
又三郎駈け抜け森の胡桃落つ
煙立つ畑のかたづけ秋思かな
大往生と言はれ通夜席秋思かな
駅ピアノ「旅愁」の曲や秋思かな
コーヒーと胡桃一粒朝のさち
縄文のかたちそこはこ鬼胡桃
この秋思喧嘩相手の居ない部屋
葉脈の透けて露はに秋あはれ

真理
多美子
公子
茂子
美智枝
千恵
由紀子
美子
幸代

新樹の会 (浦和)

残菊や山の麓に香り立つ

喜寿祝ふ十日の菊の断酒かな

能面の冷めし眼差冬近し

秋燈しシテの摺足能舞台

我が庵は色こそ無けれ残る菊

鯛雲比企能員の無念さよ

スタアにも武士にもなれず菊残る

芙蓉句会 (浦和)

子供等の指先まめに栗を剥く

旅先や紅葉の浮かぶ露天風呂

柴又の先は単線いわし雲

遠く聴く読経のリズム秋うらら

秋麗やダンスシューズの紐を締め

秋うらら大き靴跡重ね見る

秋麗や錦織りなす山の肌

珊瑚の会 (浦和)

母の歳越えて健やか暮の秋

暮の秋空の彼方に雲一つ

柚小屋に煮炊のあとやそぞろ寒

そぞろ寒人に少しの運不運

暮の秋ヘッドライトに浮かぶ雨

漁火の横一文字暮の秋

平通

修

徹雄

正文

道

清吉

鶴城

正子

道子

税子

仁

ともこ

文子

美子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

看護師の探る血管そぞろ寒

天鷲絨の淑女の帽子そぞろ寒

暮の秋むらさき濃ゆき館山寺

弔ひ一つ村人出払つてゐる暮秋

高齢化の村に移住者暮の秋

りそな俳句会 (浦和)

夜学校牛乳瓶に花一輪

遠富士に笠雲の浮く秋日和

自己紹介訛さまさま夜学生

興に乗る夜学教師の体験談

五百羅漢の笑顔振りまく秋日和

退院の妻との余生秋日和

幸多しいふことのなき秋日和

快眠をそつと見ぬふり夜学の灯

光が丘俳句教室 (東京)

野仏の供華に一握草の花

行きずりの運動会に足止めて

菊日和道狭まりて道祖神

運動会小さき奇跡を期待して

組み体操上へ上へと鯛雲

柿の木塾 (浦和)

横丁の馴染みの小店ことし酒

新走り酔うていつものお説教

昇

恵子

光子

史代

節代

節代

節代

節代

節代

節代

節代

節代

節代

節代

節代

節代

節代

節代

節代

節代

節代

節代

節代

節代

節代

節代

節代

竹春や嵯峨野を駆くる人力車

ワンカップ新酒供へり奥つ城に

新しき自分顔出す新走り

渾身の一句ものにし新酒酌む

舌にころがし少し癖ある新走

亡き父にまづは一献新走り

水明小川句会 (小川)

古戦場行く手をはばむ草紅葉

出入口なくて花野の無用心

書き留めぬ句を忘れつつ夜長かな

陽にまぶし花野の先の大花野

花野ゆく姉の面影抱きつつ

花野ゆく姉の面影抱きつつ

花野ゆく姉の面影抱きつつ

花野ゆく姉の面影抱きつつ

花野ゆく姉の面影抱きつつ

花野ゆく姉の面影抱きつつ

花野ゆく姉の面影抱きつつ

花野ゆく姉の面影抱きつつ

花野ゆく姉の面影抱きつつ

花野ゆく姉の面影抱きつつ

花野ゆく姉の面影抱きつつ

花野ゆく姉の面影抱きつつ

花野ゆく姉の面影抱きつつ

花野ゆく姉の面影抱きつつ

花野ゆく姉の面影抱きつつ

花野ゆく姉の面影抱きつつ

昇

和葉

恵子

水尾

かつ子

かつ子

かつ子

かつ子

かつ子

かつ子

かつ子

かつ子

かつ子

かつ子

かつ子

かつ子

かつ子

かつ子

かつ子

かつ子

かつ子

かつ子

かつ子

かつ子

かつ子

かつ子

かつ子

新春俳句大会のお知らせ

[日 時] 令和5年1月30日(月)12時受付・投句 12時45分開会予定

[会 場] 浦和コミュニティーセンター第13集会室
(JR浦和駅東口前パルコ10階)

[投 句] 「初明り」「歯朶」各1句

[参加費] 1,000円

[申 込] 1月6日(金)から受付開始。23日(月)までに会費と申込書(1月号に添付)を添えて発行所総務部宛にお願いいたします。

年当初の新春俳句大会です。日時をご確認の上、奮ってご参加くださいませ。

※当日は昼食の用意はありません。飲み物は各自でご持参ください。

担当：事業部

水明忌のご案内

[日 時] 令和5年2月25日(土)12時 受付・投句
12時45分 開会予定

[会 場] 浦和コミュニティーセンター第13集会室
(JR浦和駅東口前パルコ10階)

[参加費] 1,000円

※ 「水明忌」は、長谷川秋子第2代主宰、星野紗一第3代主宰、星野光二第4代主宰の忌を修する日です。日時をご確認の上、奮ってご参加くださいませ。

※ 当日は昼食の用意はありません。飲み物は各自でご持参ください。兼題などの詳細は1月号、2月号に掲載いたします。

事業部

令和5年度水明俳句会 指導者および幹事の会のお知らせ

この度、下記の要領にて水明俳句会では各例会および各句会の指導者および幹事の会を企画いたします。

嘗て数年前までは指導者および幹事の会の開催が数回行われておりました。令和4年1月には改めて指導者および幹事の会を予定しましたが、コロナ禍で開催を見合わせる事となりました。

水明俳句会の組織としての在り様を皆様と再考する機会といたします。また水明俳句会の更なる発展のための施策などの討議もいたします。

万障お繰り合わせの上、ご出席ください。

記

- ◆日 時 令和5年1月30日(月) 10:00 (9:30 受付)
約1時間半を予定
- ◆会 場 浦和コミュニティーセンター 10 F 第13集会室
(浦和パルコ内)
- ◆議案など
 - ・令和5年度の年間事業計画について
 - ・各例会、各句会の現状報告
 - ・例会、句会の会場・時間などの変更事項の報告について
 - ・コンプライアンス(著作権・ハラスメント等)について
 - ・各例会、各句会の将来像について
 - ・その他

※欠席の場合は、総務部宛に連絡をし、なお代理の出席をお願いいたします。

※当日は午後から「新春俳句大会」が開催されます。合わせてご出席ください。

令和4年12月

水明主宰 山本鬼之介
水明 常任幹事会

俳句

1月号
予告

12月24日発売
予価950円(本体864円)®

豪華新年詠

今宮池宇矢星柿	井渡坂今田多島野本	聖雄生一子男椿映	高橋睦郎
細谷	大石悦子	高野ムツオ	
高橋将夫	黒田杏子	西村和子	
辻恵美子	大木あまり	正木ゆう子	
柴田佐知子	中井和弘	片山由美子	
	寺井谷子	長谷川權	
	小澤	小川	
	小川	小川	
	小川	小川	
	小川	小川	

特集

徹底分析！心をうつ名句

連載
新評論
井上泰至「山本健吉の歳月」

合評鼎談(新メバ)……奥坂まや・津高里永子・堀本裕樹
現代俳句時評……柳元佑太

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！ 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>)など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

「特集」俳句の未来予測

秋尾敏／天野小石／大井恒行／大塚凱
奥坂まや／黒川悦子／坂口昌弘／塩見恵介
筑紫磐井／土肥あき子／仁平勝／野口の理
堀田季何／三村純也／宮本佳世乃／渡辺誠一郎

●巻頭三句

●俳句と短歌の10作競詠

高橋睦郎

小澤 實

正木ゆう子

栗木京子

中村和弘

●今月の華

岩岡中正

谷口智行

能村研三

田丸千種

神野紗希

●好評連載

南 伸坊

大西 朋

筑紫磐井

神作研一

俳壇観測

藤村公洋

坂口昌弘

酒井佐忠

忘れ得ぬ

本の窓辺

青木亮人

二ノ宮一雄

俳人の響き

一望百里

俳句四季

Haiku Shiki

2023年1月号

12月20日発売
定価1000円(税込)

<http://www.tokyoshiki.co.jp/> 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

遠山陽子

俳句四季大賞
受賞記念作品40句

創刊
40周年記念

2号連続企画

令和5年 新珠賞作品募集

水明新人賞である新珠賞作品を下記の要領により募ります。

新人登龍門の主旨をよく解されて多数のご応募をお待ちしています。

- 応募資格** 季音同人を除く同人・誌友
- 応募句** 未発表作品：15句(表題を付す)
水明集・句会報等「水明誌」及び外部に
発表した作品は不可。
- 締切** 令和5年2月末日(発行所必着)
- 応募方法** 水明12月号に応募用紙添付

選考は、新珠賞推選委員による推選結果を参考に、新珠賞選考委員会に於て受賞者を決定いたします。

尚、誌上には受賞者の作品のみを発表します。

新珠賞選考委員会委員 (10名)

山本鬼之介	網野月を	大村節代
石山かつ子	石井喜恵	井口俊晴
保坂翔太	青木鶴城	日高道を
曲淵徹雄		

新珠賞推選委員 (5名)

宇田白鷺	大橋廸代	茂木和子
椎野美代子	波多野寿子	

風 声

○現代俳句十月号——「現代俳句の風」欄

漢字バズル碁盤目うづめゆく夜長

菊池ひろこ

星飛んでこの一瞬の願ひ事

岡野順子

別れ際ふと手のふれし雨月かな

大塚茂子

天高し重低音に祈りこめ

小駒さち子

木曾節を葉味に峡の走り蕎麦

五明 昇

52ヘルツの鯨の歌も秋の声

本橋 稀香

○くちら（中尾公彦主宰）十月号——「受贈俳誌美術館」欄

地方紙にくるまれきたるラ・フランス

鬼之介

○草笛（太田土男代表）十月号——「受贈誌一詠」欄

天井に唸る昭和の扇風機

鬼之介

○好日（高橋健文主宰）十月号——「受贈誌御礼」欄

夏帯や紅さす指の板につき

鬼之介

○新月（松田碧霞主宰）十月号——「受贈俳誌紹介」欄

天井に唸る昭和の扇風機

鬼之介

○雪嶺（石本石鬼主宰）十月・十一月・十二月号——「受贈誌」欄

サンガラス外し男がなほ野暮に

鬼之介

夏帯や紅さす指の板につき

鬼之介

○太陽（吉原文音主宰）十月号——「受贈誌御礼」欄

車夫憩ふ目抜き通りの夏柳

鬼之介

○玉梓（名村早智子主宰）七・八月号——「他誌拝見」欄

出世頭をかこむ宴よ初桜

鬼之介

○菜の花（伊藤政美主宰）十月号——「諸家近詠」欄

旅ゆけば大和一望夏霞

鬼之介

○笹（山本一步主宰）十月号——「受贈誌の一句」欄

蝙蝠が夜汽車を送る山の駅

新井孝麿

（日高道を抄出）

水明発展基金御礼（敬称略）

—令和四年十月三十一日現在—

山岸久美子	2.17	口	小島喜代子	5	口
緒方みき子	2	口	小駒さち子	1	口
木村隆夫	2	口	日吉亜弥子	3	口
染矢峯雄	3	口	—合計	18.17	口—

誤植訂正

十一月号に誤植がありました。お詫びして訂正いたします。

○七四頁下段

正 受験子と共に良夜の露天風呂
誤 受験子と友に良夜の露天風呂

後記

「第十七水明抄」が、お手元に届きましたでしょうか。

「水明抄」は昭和三十年に第一号を刊行してから今回で第十七集を数えました。四年毎ですから何と六十八年もの長きにわたって続いた事になります。

「水明抄」は「第十五水明抄」から現在の型式になりました。以前はハードカバーで重厚感がありました。しかし、軽くて気軽に持ち歩けるようにと「第十五水明抄」より、現在のソフトカバーになりました。如何でしょうか。

尚、「第十七水明抄」の残部がいささかありますので、ご入用の方は、水明発行所までお申し込み下さい。一冊三五〇〇円です。

今年度の最後の行事である「水明塾」が十一月三日に行われました。昨年とは逆に、午前中に講演会を行ない午後は勉強会が行なわ

れました。

午前中に講演頂いた後藤章氏は平成十四年から平成三十年までの間に、現代俳句評論賞に十三編応募して、四回佳作を受賞し、本年第三十八回現代俳句評論賞に輝かれたそうです。尚、受賞作は「阿部完吾とA Iの言語空間について」ですが、今回は「新歳時記に見る虚子」の題で、スケールの大きなお話をお聞かせ頂きました。尚この講演は、後藤氏のご協力により水明一月号に掲載しますので、ご期待下さい。

そして午後からは、水明集の会員の方や誌友の方を対象に、全句講評講座が行われました。こちらは今月号に掲載しましたので、是非ご覧下さいませ。

今月号の巻末に、新珠賞の応募用紙を挿入しました。一人でも多くの方が挑戦なされます様に、期待しています。応募締切は二月末日です。

コロナも第八波のようです。どうぞお気をつけて。

(節代)

今月のはてな？

- 南五味子 (さねかずら)
- 晏天 (びんてん)
- 読誦 (どくじゆ・とくしょう)
- 無患子 (むくろじ)
- 齋 (もたら) す
- 接骨木 (にわとこ)
- 木耳 (きくらげ)
- 継粉 (ままこ)
- 具 (つぶさ) には
- 春夏冬中 (あきないちゅう)
- 芋茎 (ずいき)

86 84 50 36 32 32 31 23 20 16 13 頁

水明発行所受付時間
 (048-822-4741)
 曜日：(月・火・水・木・金)
 時間：12時半～午後4時半
 (土・日・祭日は休み)
 水明の行事と重なった時は休み
 (上記の時間には係がおりますので、
 ご用の方は 時間内をお願いします。)

水明

令和四年十二月号
 通巻一〇七号
 令和四年十二月一日発行

発行所 水明俳句会
 〒330-0064 さいたま市浦和区栗町四一〇二二
 電話 048-822-4741

ホームページ
 「水明俳句会」で検索

誌代	半年分	六、〇〇〇円
	一年分	一一、〇〇〇円
同人費 (誌代を含む)	一年分	二四、〇〇〇円
季音同人費 (誌代を含む)	一年分	三〇、〇〇〇円
振替	〇〇一七〇一〇一九三九三	
発行人	山本 鬼之介	
印刷所	中央美版	

水明集

二月号 十二月二十五日締切

都市又は府県名

氏名(俳号)

最上部の枠から間を開けずに楷書でお書きください。

(注意)

この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。

旧仮名つかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所〒

氏名

年齢

山紫集

三月号 十二月二十五日締切

氏名(俳号)

十二月の兼題 「冬桜」 (傍題可)

投句対象者 同人及び季音同人「花欄」「月欄」

※最上部の枳から間を開けずに楷書でお書きください。

(注意) この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を

使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って

使用して下さい。

旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

氏名

住所

年齢

季音抄

山本鬼之介

朝寒の斉唱社訓三か条
破れ蓮やぶれかぶれの命かな
大社出て手招きさるる紅葉茶屋
せせらぎの奏づるを聴く星月夜
晩秋のホルン流るる山の牧
渡り鳥天守に立てば眼の高さ
胡桃割るわれにも気負ふものありて
秋の蛇舌美しく隠れけり
暮れなづむ街晩秋のひとつ星
静けさや水の底まで秋の空
補聴器に侘しき残る冬の虫
引く波のかそけき響き草紅葉
裏山の父の匿路や麦とろろ
空澄むやジャンボ機を追ふ竹とんぼ
敷石の形それぞれ草紅葉
逆運の今日の占ひ秋の虹
外観く貌は強面木樵虫
離宮へといざなふ並木鳩の晴

境延昭
椎野美代子
島津初花
鈴木康世
田寺玲子
十倉和子
松井由紀子
大場順子
梅澤佐江
宇田白鷺
鳥羽和風
丸山マシミ
大塚茂子
近藤徹平
河野はるみ
野田静香
日高道を
青木鶴城

次の原稿を募ります。随時発行
所宛、ふるってお寄せください。
なお掲載については、編集部にお
任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽
に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内
(句に雑誌名、句集名、刊行月
を付す)

▼散歩道へ身辺トピック

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起
きた面白い話題、めずらしい経験
などの情報をお寄せください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内
(題をつけて)

▼山紫水明へ随筆

テーマ：自由

枚数：二百字詰原稿用紙五枚半

以内

水 明 抄

山本鬼之介

望潮もちほに舟を出したり鱚雲
 真青なる海を泳ぎし鱚焼く
 木鋏の快音つづく秋の昼
 待宵や易者静かに未来告ぐ
 線路工夫どかどかと来て夜食かな
 たこ焼に楊枝が二本西鶴忌
 黄金の国ジパングを黍嵐
 葉鶏頭妖しく誘ふフラメンコ
 はちきれさうに梨も農家の娘らも
 水を打ち客待つ暖簾西鶴忌
 秋草に寄り跪くカメラマン
 想ひ出のエチュードを弾く秋の昼
 撮り鉄の三脚揺する芋嵐
 新涼や細道行くもまた一興
 托鉢の休らふ野みち葛の花
 辞書といふ人生の友天高し
 秋遍路朝の馳走のかやく飯
 鶏頭や簡易舗装の割れ目より

梅澤輝翠
 菅原真理
 篠崎紀子
 新井のり子
 横山君夫
 渋谷さいち
 染谷正信
 新曆文
 阿部幸代
 霜多光代
 西幅公子
 丸屋詠子
 反町修
 越田栄子
 元田亮一
 山岸久美子
 池田瑠子
 新井孝磨

水明例会案内	句会名	日 時	会 場	指 導 者	幹 事
	第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	茂木和子 境延昭
	第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	青木鶴城 太田絹映
	第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五曲明昇 淵徹雄
	第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	椎野美代子	境延昭 石井喜恵
	第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤佐江 河野はるみ
	若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	正木萬蝶 石田慶子
	関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化(セ)	大橋勉代	森本早苗